

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

# 寺 山 遺 蹤

平成2年度県営農村総合整備パイロット事業  
(尾鈴地区山路Ⅰ工区)に伴う埋蔵文化財発掘  
調査報告書

1992・2

宮崎県・西都市教育委員会

# 序

西都市教育委員会は、宮崎県・ツ瀬川土地改良事務所の委託を受けて、県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴地区山路Ⅰ工区)に伴う発掘調査を実施いたしました。本書はその発掘調査結果の報告であります。

調査の結果、縄文時代早期の集石遺構をはじめとして同時代の土器・石器、また、弥生時代及び古墳時代の住居址などの遺構や遺物、さらに、県内でも珍しい方形の周溝状遺構が検出され、古来より先人がこの地に住み生活していたことが判明しました。

西都市は、“古墳のまち”として周知されていますように特別史跡・西都原古墳群をはじめ多くの古墳が各所に点在していますが、各種の埋蔵文化財発掘調査によって、古墳時代はもとより以前及び以後の歴史の解明が進み、西都市の古代の全容が浮かびつつあります。これを機会により一層古代解明に努力してまいりたいと思います。

この報告書が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されると共に、埋蔵文化財に対する理解と認識が得られれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってはご指導・ご協力いただいた県文化課・宮崎県・ツ瀬川土地改良事務所をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成4年2月28日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

## 例　　言

1. 本書は、県営農村総合整備パイロット事業(尾鈴地区山路工区)に併い、平成2年度に実施した寺山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県一つ瀬土地改良事務所の委託を受けて、西都市教育委員会が実施した。
3. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体　西都市教育委員会

教育長　平野　平

社会教育課長　清　郁男

同文化財係長　伊達　博敏

調査員　日高正晴(西都原古墳研究所長)

養方政幾(主事)

調査作業員　篠原時江・黒木トシ子・緒方タケ子・久保田要子

長谷川クミエ・藤原秋子・関屋敏子・野田サエ子

野田良子・斎藤里子・野田タツ子

黒川種秋・新城静夫

整理作業員　福田頼子

4. 遺物の実測・トレース・図面の作成は福田と養方が行った。

5. 本書の執筆はV・まとめを日高が担当し、その他の執筆及び編集は養方が行った。

6. 本書に示す方位は磁北である。

7. 土層・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖による。

8. 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

## 本文目次

I. 調査に至る経緯 .....	2
II. 遺跡の位置と歴史的環境 .....	3
III. 調査の概要 .....	5
IV. 造構と遺物 .....	9
1. 縄文時代の遺構と遺物 .....	9
2. 弓生時代の遺構と遺物 .....	25
3. 古墳時代以降の遺構と遺物 .....	27
V. まとめ .....	41

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図 .....	1
第2図 造構分布図 .....	2
第3図 基本土層図 .....	10
第4図 1号～4号集石造構実測図 .....	12
第5図 5号・6号集石造構実測図 .....	13
第6図 7号～9号集石造構実測図 .....	14
第7図 10号～13号集石造構実測図 .....	15
第8図 14号・15号集石造構実測図 .....	16
第9図 16号～18号集石造構実測図 .....	17
第10図 造構分布図(アカホヤ大山灰層面) .....	23
第11図 2号・3号住居址実測図 .....	26
第12図 1号住居址実測図 .....	27
第13図 1号住居址出土壺型土器 .....	28
第14図 4号住居址実測図 .....	29
第15図 5号住居址・方形土坑実測図 .....	30
第16図 1号方形周溝状造構実測図 .....	32

第17図 出土遺物実測図及び拓影	36
第18図 出土遺物実測図及び拓影(縄文土器)	37
第19図 出土遺物実測図及び拓影(縄文土器・弥生土器)	38
第20図 出土遺物実測図(土師器・須恵器)	39
第21図 出土遺物実測図及び拓影(白磁・青磁・陶器・石器)	40

## 表 目 次

表 1 縄文土器觀察表	20
表 2 土師器觀察表	34

## 図 版 目 次

図版 1 寺山遺跡遠景・基本土層・1号～4号集石遺構検出状況	45
図版 2 5号～11号集石遺構検出状況	46
図版 3 12号～18号集石遺構検出状況	47
図版 4 集石遺構分布状況・1号・2号住居址検出状況	48
図版 5 2号～5号住居址・土坑検出状況	48
図版 6 1号・2号方形削溝状遺構・1号～3号掘立柱建物検出状況・遺構分布状況	50
図版 7 出土遺物	51
図版 8 出土遺物	52
図版 9 出土遺物	53



番号	遺跡名	時代
1001	香取郡古墳群	古墳
1002	豊木西古墳群	古墳
1003	上ノ原遺跡	銅~鉄
1004	寺山遺跡	銅~鉄
1005	清水遺跡	銅~鉄
1006	下原の遺跡	銅~鉄
1007	上原古墳跡	銅~鉄
1008	白向遺跡	銅~鉄
1009	圓分遺跡	銅~鉄
1010	上宮遺跡	銅~鉄

番号	遺跡名	時代
1011	上宮古墳	古墳
1012	上宮城跡	中世
1013	三宅城跡	銅~社
1014	圓跡道跡	銅~鉄
1015	酒元遺跡	銅~鉄
1016	堂ヶ島遺跡	銅~鉄
1017	寺崎遺跡	銅~鉄
1018	上宮遺跡	銅~鉄
1019	經原	平安
1020	法元遺跡	銅~鉄

番号	遺跡名	時代
1021	信子丸遺跡	歎~亞
1022	上原古墳1号	古墳
1023	上原古墳2号	古墳
1024	上原古墳3号	古墳
1025	石賀遺跡	歎~亞
1026	原口遺跡	銅~鉄
1027	守原遺跡	銅~鉄
1028	丸山遺跡	銅~鉄
3001	松本古墳	古墳
3002	松本遺跡	古墳

第1図 寺山遺跡位置図

## I. 調査に至る経緯

西都市街地の西南に位置する清水地区は、九州山地から舌状に延びた台地を中心に畠地が及び低地に水田が広がった比較的条件に恵まれた地域である。

しかし、地域のほとんどが火山灰土壌に覆われ、気候は温暖多雨地帯で、降雨量の季節的变化が著しいため畠作物は低生産であり、水田も土地基盤が未整備なため農業經營の近代化に大きな障害となっている。

このようなことから、同地域は県営農村基盤総合整備パイロット事業の対象地域となり、本年度尾鈴地区山路工区のは場整備が実施されることとなった。

尾鈴地区山路工区の事業は全体で28.1ヘクタール、1～4工区に配分されているが、その1工区内に円墳3基（清水西原古墳群）を含む周知の埋蔵文化財包蔵地の寺山遺跡が所在するため、県文化課・県・ツ瀬土地改良事業所・市耕地課・市教育委員会の4者で埋蔵文化財の保護について協議を重ねた。

協議の結果、県文化課において造構及び層位の残存状況等を確認するための試掘調査を実施し、その結果をもとに再度協議することとなった。

試掘調査の結果、層位の残存状況は極めて良好で、また、アカホヤ火山灰上層で土師器、アカホヤ火山灰下層で焼石群（礫群）が確認された。

その結果をもとに、再度協議が成され、隣接した古墳に影響を与えないよう配慮することを合意し、対象地については事実施行上現状保存が困難であることから、全面の発掘調査を実施することとなった。

調査は、県・ツ瀬土地改良事業所から委託を受けて、西都市教育委員会が実施し、平成2年10月18日に着手、同年12月12日に終了した。

## II. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のはば中央部に位置する内陸都市で、地形としては西方に九州山地を背負った形容を表し、その九州山地から岬様に南東へ、東へと幾条にも台地が延びている。また、市街地を中心とする平野部の東端を南流する一つ瀬川及び支流の三財川・三納川等が沖積地を潤し、豊かな農地が形成されている。

西都市の遺跡は、この幾条にも延びた台地上を中心に分布している。時代的には、表掲ではあるものの諏訪・権現・丸山・人口川・宝財原等でナイフ形石器・尖頭器・細石核が確認されており、旧石器時代まで遡ることができる。

また、縄文時代の遺跡は、鴨目原遺跡・丸山遺跡・串木第2遺跡・中原遺跡・上原遺跡等で確認されているが、串木第2遺跡・中原遺跡からは早期の土器とともに集石遺構が検出され、鴨目原遺跡からは方形プランの竪穴式住居址等が検出されている。

弥生時代の遺跡は、寺原第1遺跡・寺原第4遺跡・下尾筋遺跡・串木第2遺跡等で確認されている。寺原第1遺跡・寺原第4遺跡では弥生終末前後の張出しを有する変形住居址が検出され、下尾筋遺跡では弥生中期の口縁部に円形浮文を有する大型壺及びV字溝等が検出されている。

古墳時代については「古墳のまち西都」と言われているように先史時代に比して急激に文化が進み、畿内系統の前方後円墳を中心とする古墳群や独立墳が各地に築造されるようになる。特別史跡西都原古墳群をはじめ三納古墳群・三財古墳群・茶臼原古墳群・清水西原古墳群及び独立墳の現存650基程の高塚墳、一つ瀬川以北を中心に分布している方格塙・久文鏡・環頭大刀・双龍文環頭柄頭が検出された千畳横穴墓群や上江・野竹等の各横穴墓群、一つ瀬川以南の西都原台地・六野原台地等で確認されている地下式墳がある。中でも全国的に周知されている西都原古墳群は西都原台地上を中心に、柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成されている。さらに、西都原台地の中央部には、特別史跡309基には含まれない男狹穗塚と女狹穗塚古墳（明治28年12月4日宮内庁陵墓参考地として指定）2基の巨大古墳が威容を誇っている。その他遺跡として松本遺跡・酒元遺跡及び昨年度実施した遺跡所在確認調査で確認された童子丸遺跡等がある。

古墳時代以降の遺跡は、奈良時代西都原台地南側の中間微高地に日向國府が置かれ、また、同台地に日向國分寺・同尼寺等が保存されることから更に高度な文化がもたらされ、この地域が古代日向国を中心的な役割を果たしてきた。さらに、寺崎遺跡・上妻遺跡等から布日瓦やこれに関連した遺構が検出され、また、一説によると同地域が日向國府の推定地にもなつ

ていることから非常に興味深い。

そして、平安時代には全国的な荘園制社会の中に編成され、さらに、南北時代の初頭には足利尊氏から都於郡を贈与された本地に下向した伊東氏一族とその子孫によって日向経略が進められていった。その中心となったのは都於郡域で、日向地内に48城を従えるが、元亀3年(1572)真幸攻めの失敗により運命も尽き果て、天正5年(1577)都於郡落城となり、ここに200数十年にも及ぶ伊東氏の支配勢力も終結する。伊東氏に代わって日向を支配するのが島津氏で、東米良地城をのぞいて統治された。

以下戸戸時代当初には上総北・下総北が延岡藩に属されるが、中期になると天領地として編成される。その他都於郡・三納・三財・妻は佐土原藩に属していたが、明治4年の廃藩置県の令によって佐土原藩は終わる。明治・大正時代には大きな変動は見受けられないが、昭和30年(1955)明治22年施行の市町村制による妻町と上総北村が合併して西都町となり、昭和33年三納村と都於郡とが西都町と合併し同年11月市制施行、さらに、昭和37年三財村と東米良村とが第3次合併し現西都市となるなどめまぐるしい変遷・変革を見せた。

ところで、寺山遺跡は九州山地が南東に向かって細長く伸びた台地上(清水台地)に位置し、市街地の南西1.6kmにあたる。台地南側低地は一つ瀬川の支流である三納川・三財川の合流地点で、周辺には水出地帯が広がり、豊かな潤いを与えていた。同河川は市内南東端に位置する現王島近くで、本流の一つ瀬川と合流し、佐土原へと南流する。

同台地上(清水台地・永野原台地)及び南側微高地さらに低地(水田地帯)・加えて南西三納川を隔てた対岸台地上(平都地区)には県指定・清水西原古墳群・三納古墳群が点在している。中でも、東北2.7kmの永野原台地上には通称「百塚原」と呼ばれる38基の古墳が点在し、東北1.5kmには100m超級の国指定「松本塚古墳」が泰然とその姿を横たえている。

なお、この「百塚原」からは大正時代に金銅製の馬具類が発見され、現在国宝に指定されている。また、松本塚古墳についても、昭和61~63年度にかけて西都市教育委員会において県営圃場整備事業に伴う発掘調査を実施し、多量の須恵器及び土師質円筒埴輪をはじめ形象埴輪等の貴重な資料を得ている。また、北東・山路川を隔てた対岸台地上には、特別史跡・西都原古墳群が点在する西都原台地がある。

調査地は、発掘調査以前は杉山及び椎木山で、昭和60年度実施した遺跡詳細分布調査においては遺物等は確認できなかったが、周辺地域(寺山遺跡)において弥生土器・土師器・須恵器等を確認し、また、隣接して3基の円墳(清水西原古墳群)が点在し、さらに、舌状の平坦地で遺跡の立地条件もいいことから遺構の存在が推定される。

### III. 調査の概要

調査は対象地の台地全面が削平され低地水田とほぼ同レベルとなることから、全面の発掘調査を実施した。

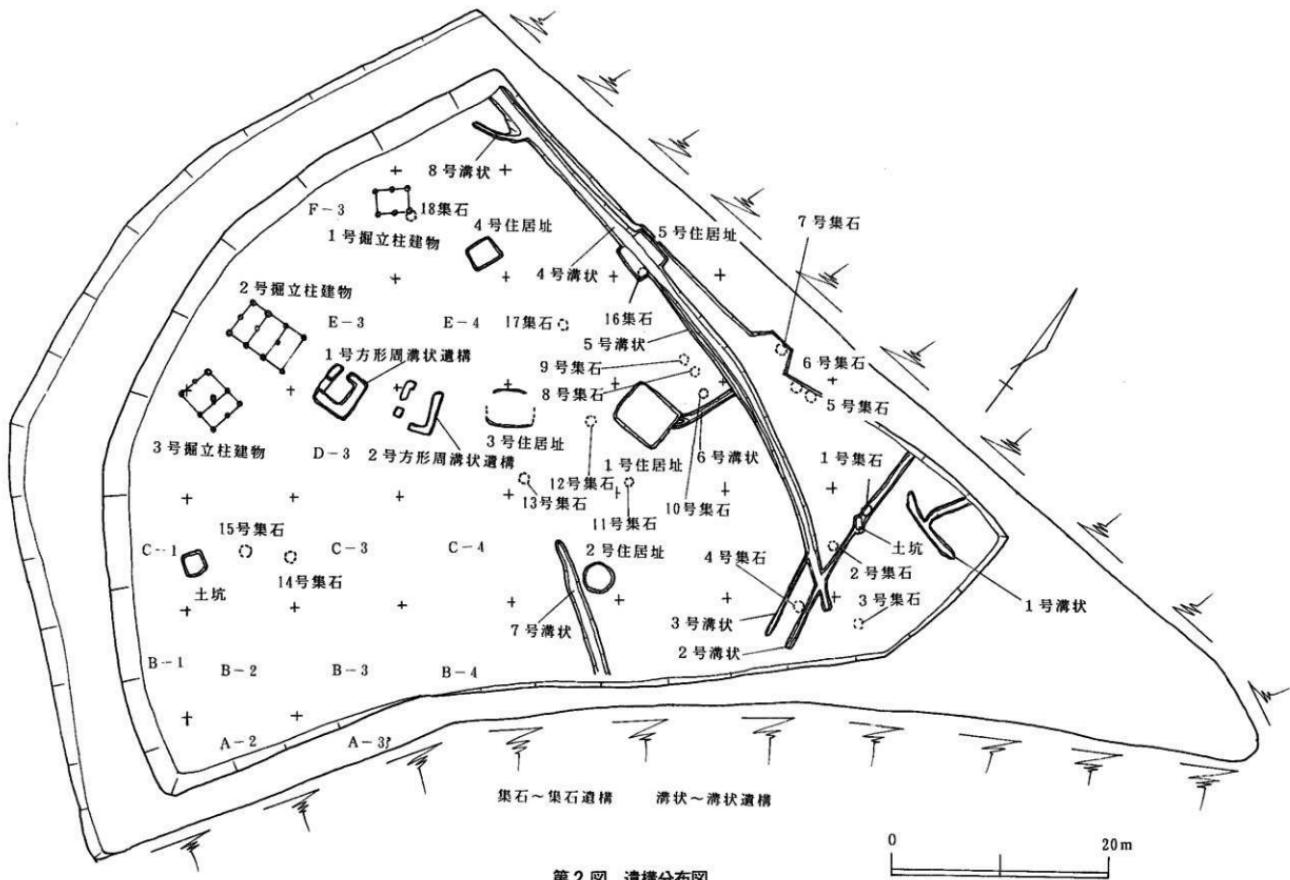
まず、当遺跡には県教育委員会の試掘調査の結果アカホヤ火山灰層が残存しているのが確認されたので、その結果をもとに重機により表土及び黒色土を剝ぎアカホヤ火山灰層面での本格的な調査に入った。また、ほぼ東西南北に10m方のグリッドを設定し、遺構・遺物の確認を行った。

そして、再び重機によりアカホヤ火山灰層を剝ぎアカホヤ層下層の黒褐色土以下の調査に入った。最後に、旧石器時代遺物等確認のためのトレンチを各所に設定し調査を行った。

調査の結果、アカホヤ火山灰層下層の黒褐色土から縄文時代早期の集石造構18基、アカホヤ火山灰層面で弥生時代の方形プランの竪穴式住居址1軒及び不整形の円形プランの竪穴式住居址1軒・古墳時代の竪穴式住居址3軒・方形の周溝状造構2基・方形土坑1基・掘立柱建物3軒及び925個の柱穴群等が確認された。また、遺物は小片ではあるものの縄文土器をはじめ土師器・須恵器等や石鎌・ナリ石等の石器が出土している。

これらの詳細については後述するとして、県内では珍しい方形の周溝状造構が確認されたこと、また、集石造構が整然とまとまって検出されたこと等は大きな成果であった。





第2図 遺構分布図

## IV. 遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 造 構 (第4~9図)

縄文時代の造構は台地北側及び東側縁辺部を中心に集石造構18基が検出されている。いずれも円形プランを有し、直径0.7~1.5m、掘込みを有しているものと掘込みを有しないものに分類されるが、掘込みを有しているものでも比較的浅く、また、全体的に県内他遺跡に比して円礫を多く使用しているのが特色である。さらに、市内中原遺跡の集石造構に見られるような、底部に長大の石を配していないのも特色である。検出層位は、すべてアカホヤ火山灰下層の黒褐色ローム層からである。

1号集石造構は、C-8グリットから検出されたもので、径1.4mの円形プランを呈しているが、掘込みを有せず、中央部に25cm前後の石を配している。中央部に長大石を配しているのは1号集石造構のみである。

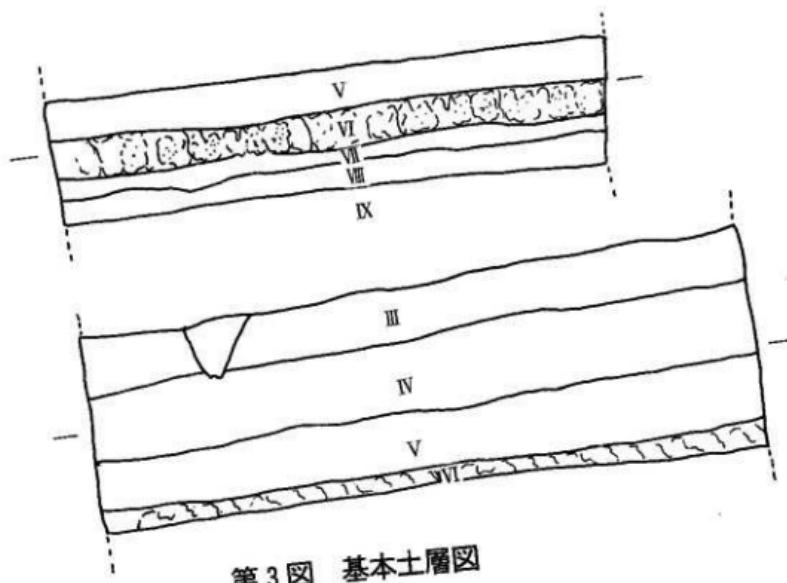
2号集石造構は、C-8グリットから検出されたものであるが、上部部分は削平され、底部付近の礫がわずかに検出されたのみである。径0.84m・深さ0.1mの円形プランを呈し、底部から炭化物が出土している。

3号集石造構は、B-8グリットから検出されたもので、長軸0.9m・短軸0.76m・深さ0.12m、やや梢円形状の円形プランを呈している。長さ7cm及び15cm前後の礫が無規則に集積されている。

4号集石造構は、B-7グリットから検出されたもので、径1.0m・深さ0.1m、南側がやや張り出した円形プランを呈している。掘込みは凸レンズ状で、大小の礫が無規則に集積されている。

5号集石造構は、D-7グリットから検出されたものであるが、当初礫が検出された段階では長軸4.4m・短軸3.4mの範囲に礫が散在しており、大型の集石造構と思われたがその礫を取り除いた結果、2基の集石造構が隣接していることが確認された。径1.4m掘込みは浅く(0.06m)プランがはっきり確認できないが円形プランを呈していると考察される。大小の礫が無規則に集積されている。また、共伴遺物として縄文早期の塞ノ神式土器が3点出土している。

6号集石造構は、D-7グリット5号集石造構の西側に隣接して検出されたもので、5号集石造構同様プランがはっきり確認できないが、径1.2mの円形プランを呈していると考察される。大小の礫が無規則に集積されている。



第3図 基本土層図

- I ~表土
- II ~黒色土
- III ~アカホヤ火山灰層
- IV ~褐色土
- V ~黒褐色土
- VI ~褐色土
- VII ~明褐色土
- VIII ~にぶい黄橙色土
- IX ~にぶい黄橙色土 (ジャリ混り)

7号集石造構は、E-7グリットから検出されたもので、径1.5m・深さ0.22m、やや不整形な円形プランを呈している。掘込みは凸レンズ状で、大小の礫が無規則に集積されているが、上部の礫は15cm前後、下部の礫は20cm前後と、全体的に下部の方が大きな礫を使用している。

8号集石造構・9号集石造構は、E-6グリットから検出されたものであるが、掘込みはなく、8号集石造構は小範囲に、9号集石造構は縦長に大小の礫が集積されている。

10号集石造構は、D-6グリットから検出されたもので、長軸1.17m・短軸0.95m、やや楕円形状の円形プランを呈している。掘込みは凸レンズ状で深さ0.1mを計る。大小の礫が無規則に集積されている。共伴遺物として塞ノ神式土器及び溝式土器がわずかに出土している。

11号集石造構は、10号集石造構同様D-6グリットから検出されたものである。掘込みが浅くプランが確認できないが、円形プランと考察される。径1.1mの範囲内に大小の礫が集積されている。

12号集石造構は、D-5グリットから検出されたもので、径0.75m、西側で掘込みを確認できなかつたが、円形プランを呈している。大小の礫が無規則に集積されている。

13号集石造構は、12号集石造構同様D-5グリットから検出されたものであるが、掘込みはなく径1.8mの範囲以内に大小の礫が無規則に配されている。

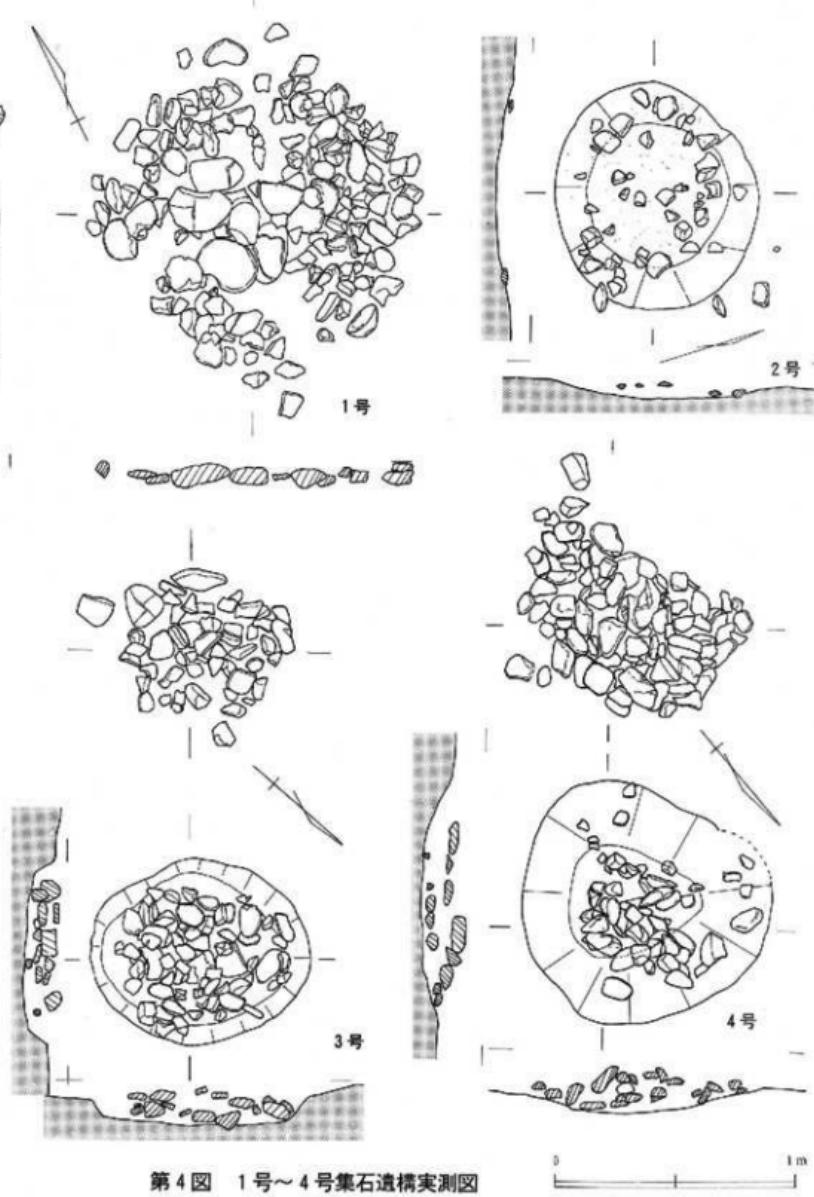
14号集石造構は、C-2グリットから検出されたもので、径1.15m・深さ0.18mの円形プランを呈している。掘込みは凸レンズ状で、大小の礫が無規則に集積されている。共伴遺物として縄文土器がある。小片で、しかも表面の剥離が著しく文様が観察できない状態である。

15号集石造構は、14号集石造構同様C-2グリットから検出されたもので、径1.1m・深さ0.17mの円形プランを呈している。掘込みは凸レンズ状で、大小の礫が無規則に集積されている。

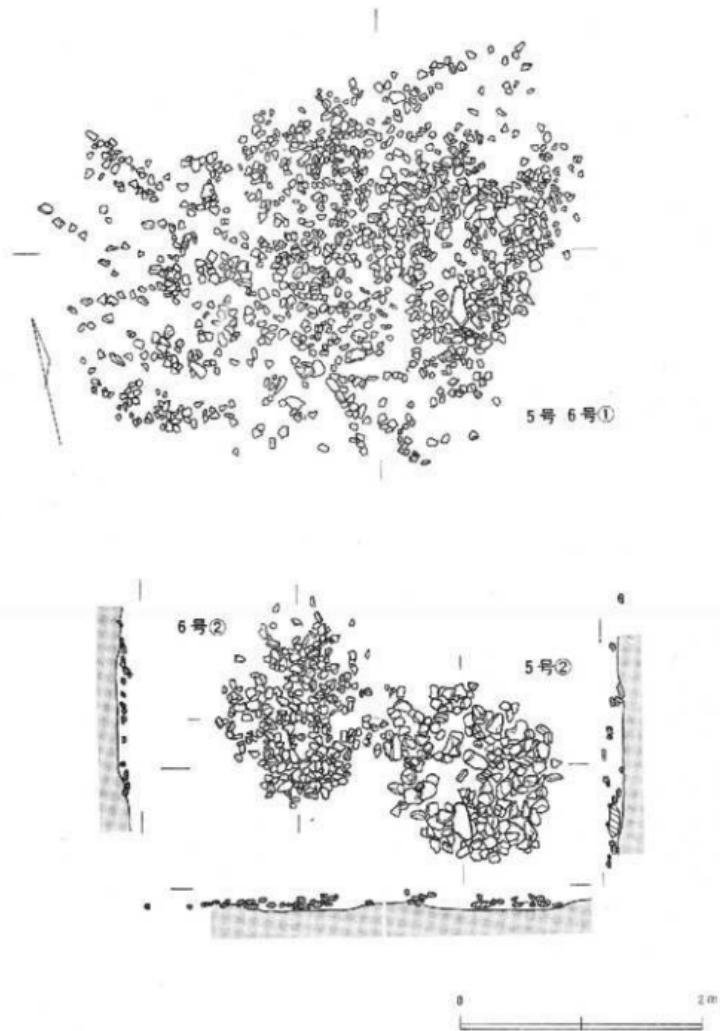
16号集石造構は、F-6グリットから検出されたものであるが、掘込みもなく、わずかの礫が集積されているのみで、集石造構と断定できない。しかし、周辺に礫がなく、ここのみ集積されていることから、一応集石造構と判断した。

17号集石造構は、E-5グリットから検出されたものであるが、掘込みは不整形である。径1.4mの範囲以内に大小の礫が集積されている。

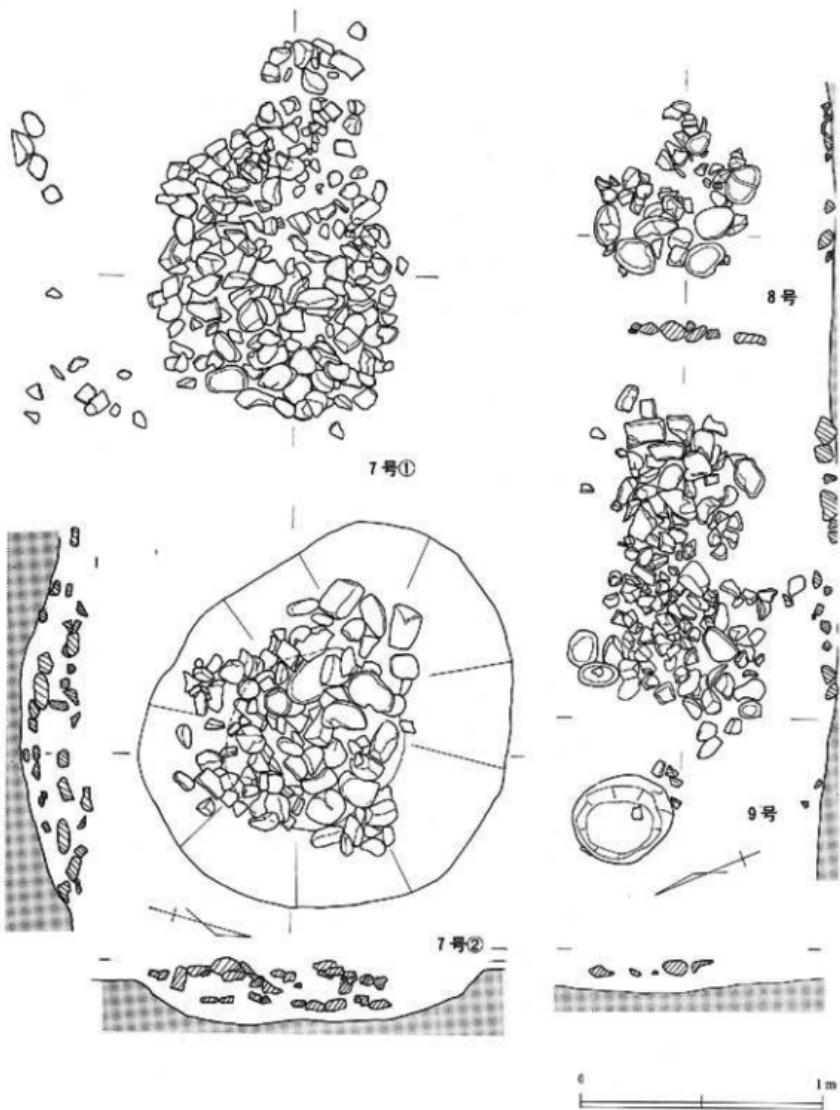
18号集石造構は、F-4グリットから検出されたものであるが、掘込みは西側で確認できなかつた。円形プランと考察される。掘込みは凸レンズ状で東側で深さ0.12mを計る。



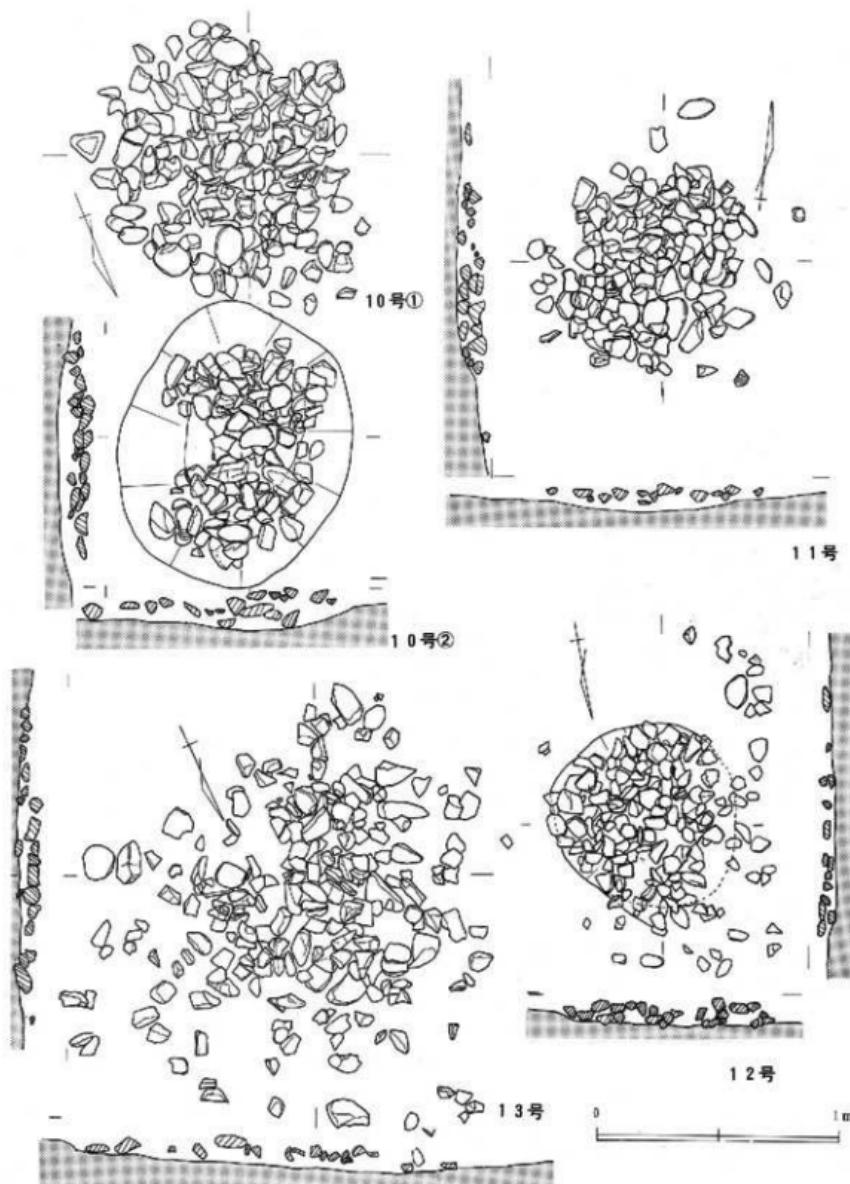
第4図 1号～4号集石遺構実測図



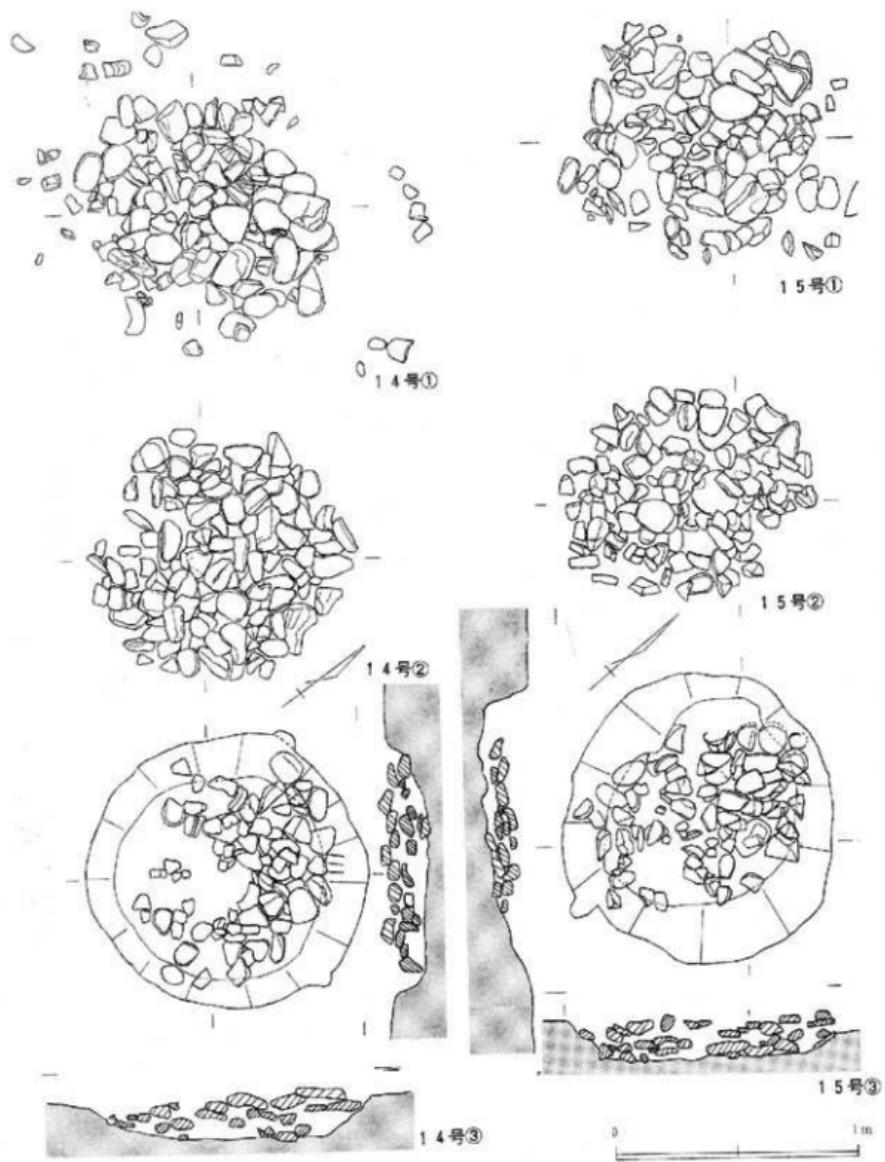
第5図 5号・6号集石造構実測図



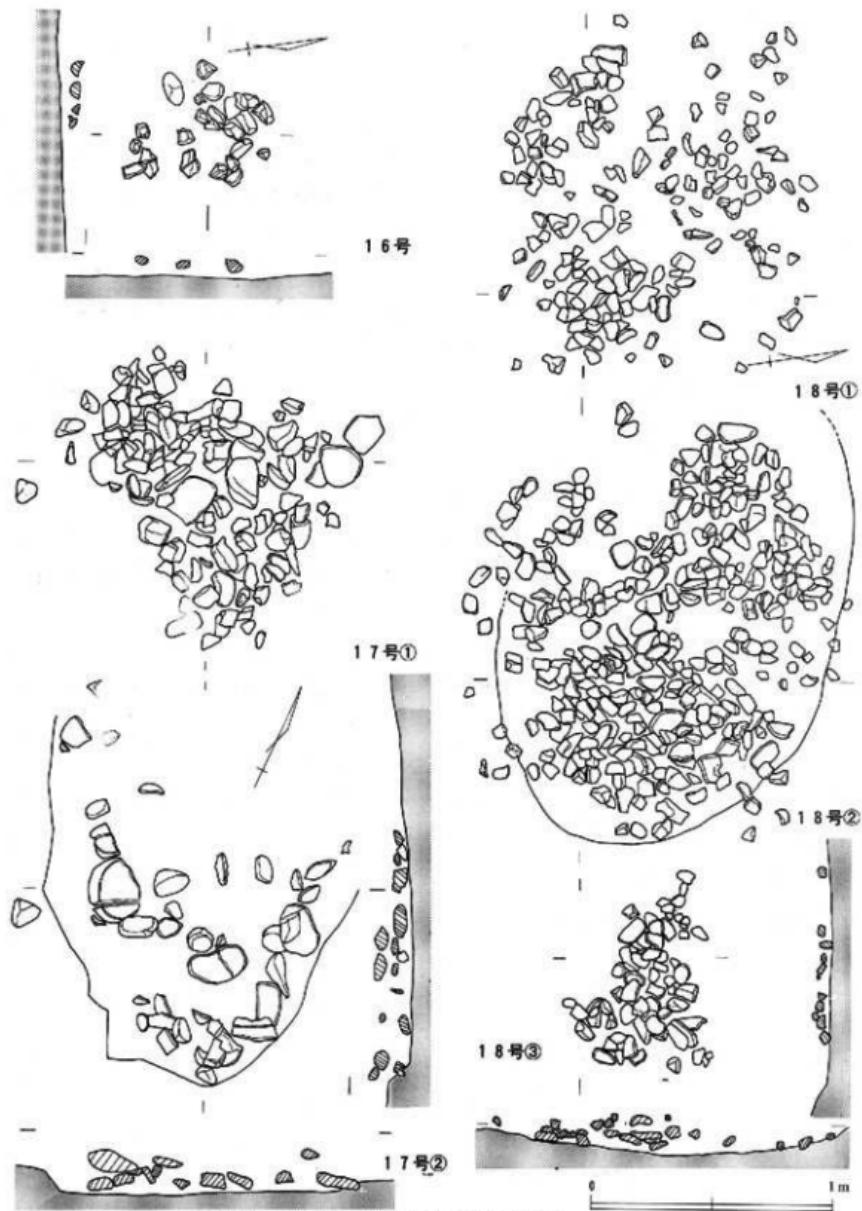
第6図 7号～9号集石遺構実測図



第7図 10号～13号集石遺構実測図



第8図 14号・15号集石遺構実測図



第9図 16号～18号集石遺構実測図

## (2) 遺物 (第17~21図)

### 縄文土器 (第17~19図)

縄文土器は台地中央部から東側にかけて、アカホヤ火山灰層直下で轟式土器、集石遺構と共に伴して塞ノ神式土器が出土している。全体的な点数は180点程で、比率的には轟式土器が90%以上を占めている。

これらの土器群は、器形及びモチーフによっていくつかに細分されるが、レベル的にもほとんど差異がなく、レベルによって相瓦関係を考慮するのはむつかしく、細分のみに留まった。これらの土器の詳細については観察表を付した。

### 塞ノ神式土器 (第17図1~4)

5号集石遺構から3点(1・2・3)及び10号集石遺構から2点・他1点の計6点出土している。いずれも撫糸文系の土器である。

1~3は同一個体と思われる。口唇部に刻目を有し、口縁上部及び頸部に4条の平行凹線を施し、その間にジグザグ状の4条の凹線を施している。胸部には縦位の平行する凹線内に輻位の撫糸文を施している。4は頸部で5条の平行凹線と口縁部にジグザグ状の凹線を施している。これらの文様の特徴から塞ノ神A式bである。

### 轟式土器 (第17図5~19図26)

当遺跡出土の縄文土器のほとんどを占める土器群であるが、全体的に小片が多い。器形及びモチーフによって大きく3つに分類できる。

I類 口唇部に刻目を有し、外面に貝殻腹縁あるいは板状施文具を用いて縦位の条痕文を施した後、横位及びジグザグ状の条痕を施し、内面は貝殻条痕後ヨコナデ又はヨコナデ調整のもの(6~15)

- a 口唇部が斜状のもの(6~9)

- b 口唇部が平坦なもの(9)

II類 口唇部に刻目を有し、外面は口縁部上部に横位、以下ジグザグ状の条痕を貝殻腹縁あるいは板状施文具を用いてわりと乱雑に施し、内面はの内面は貝殻条痕後ヨコナデ又はヨコナデ調整のもの(13~26)

III類 口唇部に刻目を有し、外面は口縁部上部に横位、以下縦位の条痕を板状施文具によって施し、内面は横位の貝殻腹縁による調整を施しているもの。(5)

以上3つに分類したが、いずれも轟A式土器に含まれるものである。この土器群は近年アカホヤ火山灰層直下から出土することから注目されているもので、当遺跡においてもそれが実証されたことになるが、I~III類それぞれについてレバーレには差異がない。この轟式

土器については発生の問題も含め変遷についても研究者によって見解の隔たりが大きいが、<sup>(1)</sup>近年、注目される見解として高橋信武氏が従来縄A式のものを鎌石橋式と縄1式に、外面に粘土紐貼りつけによる隆起線文をもつ縄B式を縄2～5式に細分し、発生段階及び変遷等について再検討されている。この中に当遺跡の縄式土器を当てはめるとⅠ類が鎌石橋式、Ⅱ・Ⅲ類が縄1式に類似しており、最も古い段階の土器が出土していることとなる。

#### 石 器（第21図）

石器は石錐5点・すり石5点、その他フレイク16点が出土しているが、ほとんどがアカホヤ火山灰層下から出土したもので、時代的には集石造構と共に伴する縄文早期のものと考察される。

#### 石 錐（第21図59～63）

形態的には二等辺三角形（59）と三角形（60～63）に分類されるが、すべて無茎である。基部でみると、凹基式のもの（59～62）と平基式のもの（63）とがある。石材はチャート（59）・黒曜石（60・62）・安山岩系（61・63）が使用されている。

#### す り 石（第21図64～68）

形態的に円形に近いもの（65～68）と楕円形のもの（64）とがある。64は長軸14.9cm・短軸10.8cm・厚さ4.7cm、65は直径10.1cm・厚さ4.2cm、66は長軸8.5cm・短軸8.9cm・厚さ4.0cm、67は長軸9.6cm・短軸9.3cm・厚さ5.0cm、68は長軸7.2cm・短軸6.3cm・厚さ3.6cmを計る。石材は砂岩系の石（64～67）及び赤色砂岩（68）が使用されている。

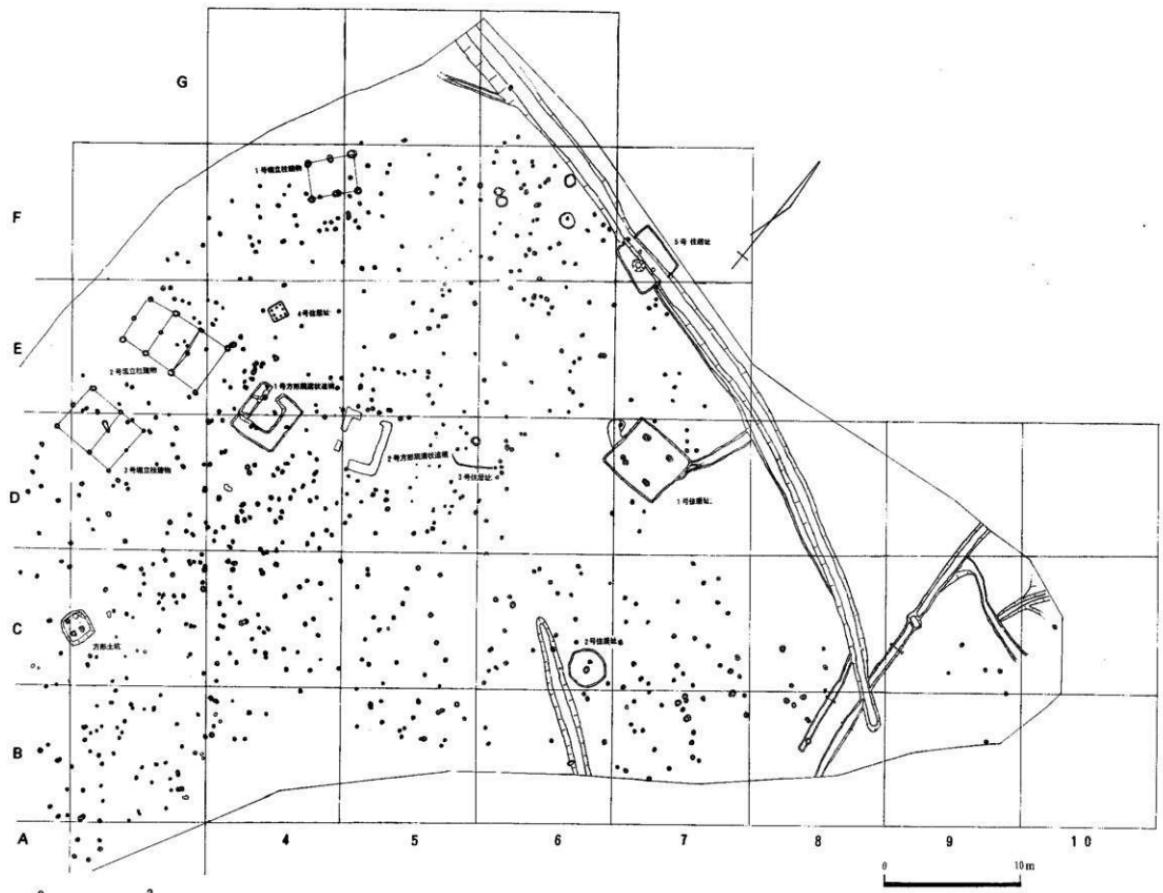
註(1) 高橋信武「考古学雑誌」—縄式土器再考— 第75巻 第1号 1989年9月

表1 純文土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第17回	1	深鉢	頭部	顎部に横位の凹線 口縁上部に縦位の凹線 内に幾条文	斜位のハケ	良好	橙色 5YR6/6	褐色 7.5YR4/4	2mm前後の砂粒を含む 白雲母混入	
"	2	"	口縁部	口唇部に刻目 口縁上部と顎部に 横位の凹線を施し その間に4本の山形狀平行凹線文	ナデ	"	明黄褐色 10YR7/6	土黃褐色 10YR7/4	2mm前後の砂粒を含む 白雲母混入 金雲母混入	5号集石遺構から出土
"	3	"	"	"	ナデ	"	橙色 7.5YR6/6	土黃褐色 10YR5/4	"	3と同一個体と思われる
"	4	"	頭部	山形状の凹線文 横位の凹線文	ナデ	"	浅黄褐色 7.5YR6/6	浅黄褐色 10YR8/4	わりと荒い 白雲母混入	
"	5	"	口縁部	口唇部に刻目 口縁上部に縦位の 条痕文 脣部に縦位の条痕 脣斜位の条痕	横位の条痕	"	土黃褐色 10YR4/3	褐色 10YR4/6	2mm前後の砂粒を含む	口唇部は平坦 外面と内面の条痕 の施文具が異なる
"	6	"	"	口唇部に刻目 口縁上部に縦位の 条痕文 脣部に縦位の条痕 脣斜位の条痕文	ヨコハケ	"	土黃褐色 10YR7/4	土黃褐色 10YR7/4	"	口唇部は尖っている
"	7	"	"	口唇部に刻目 口縁上部に縦位の 条痕文 脣部に縦位の条痕 脣斜位の曲線的な 条痕文	横位の条痕後ナデ	"	明赤褐色 2.5YR5/6	土黃褐色 10YR5/4	わりと荒い 白雲母混入	口唇部は外側にな っており外側が尖 った形を呈してい る
"	8	"	"	"	"	"	暗灰黄色 2.5Y4/2	淡黄色 2.5Y7/4	2mm前後の 砂粒を含む	"
"	9	"	"	"	ヨコハケ	"	橙色 7.5YR7/6	土黃褐色 7.5YR5/4	2mm前後の 砂粒を含む 白雲母混入	口唇部は平坦
"	10	"	脣部	縦位の条痕後横位 及び斜位の山形状 の条痕文	横位の条痕後ナデ	"	浅黄褐色 10YR8/4	淡黄色 2.5Y7/3	3mm前後の 砂粒を含む	
第18回	11	"	"	"	"	"	土黃褐色 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/4	4mm前後の 砂粒を含む 白雲母混入	
"	12	"	"	"	ヨコハケ	"	青灰色 2.5Y5/1	明黄褐色 2.5Y7/6	2mm前後の 砂粒を含む 白雲母混入	
"	13	"	"	"	"	"	土黃褐色 10YR7/	土黃褐色 10YR7/4	"	
"	14	"	"	縦位の条痕後横位 及び斜位の曲線的な 条痕文	"	"	土黃褐色 10YR7/3	土黃褐色 10YR5/3	"	
"	15	"	"	縦位の条痕後横位 及び斜位の山形状 の条痕文	"	"	土黃褐色 10YR7/4	褐色 2.5Y7/3	"	
"	16	"	口縁部	口唇部に刻目 横位及び斜位の条 痕文	"	"	橙色 5YR6/6	土黃褐色 10YR7/4	"	口唇部は平坦

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第18回	17	深鉢	口縁部	口縁部に割目 口縁部に横位の条痕	横位の条痕	良好	ヒル色 5YR6/4	ヒル色 5YR6/4	2mm前後の 砂粒を含む	口唇部が厚い
"	18	"	"	口縁部に横位・斜位に斜位の薄い条痕	ナデ	"	明赤褐色 5YR8/8	明赤褐色 5YR8/8	"	口唇部が尖っている 1号住居出土
"	19	"	"	口縁部及び胴部に 斜位の条痕	ヨコナデ	"	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	"	口唇部がやや丸い
"	20	"	胴部	斜位の条痕	斜位の条痕後ヨコ ナデ	"	ヒル色 10YR5/3	ヒル色 10YR5/4	"	
"	21	"	"	斜位の条痕	ナデ	"	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/8	"	
"	22	"	"	斜位の条痕	ヨコナデ	"	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	"	
"	23	"	"	横位及び斜位の条痕	"	"	橙色 5YR6/8	ヒル色 10YR7/4	"	
第19回	24	"	"	斜位の条痕	"	"	橙色 7.5YR6/8	橙色 7.5YR6/6	"	
"	25	"	"	斜位の条痕である が箇文単位間が広い	横位及び斜位の条 痕後ヨコナデ	"	黄橙色 7.5YR7/8	浅黄橙色 10YR8/4	"	
"	26	"	"	斜位の間隔の広い 条痕で所々に箇文	斜位の条痕後ヨコ ナデ	"	ヒル色 10YR6/4	黄褐色 10YR6/6	"	





第10図 遺構分布図（アカホヤ火山灰層面）

## 2. 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 遺 構 (第10図)

本遺跡検出の住居址 5軒のうち 2軒（2号・3号）が弥生時代の住居址と考察される。

#### 住 居 址 (第10図)

2号住居址は南側C-5グリットから検出されたもので、不整円形プランの竪穴式住居址である。径2.8m、壁面は40度で立ち上がり、壁高は0.1~0.15mを計る。床面は凹レンズ状で、中央部には径0.4m程の掘込みを有している。円形柱穴1個を検出しているのみで、径0.3m・深さ0.21mを計る。遺物は壺型土器の小片が出土している。

3号住居址はD-4からD-5グリットにかけて検出されている。プランは南側及び北側のみ壁面が残存しているのみで断定できないが、一辺3.6m（推定）の方形と思われる。中央には径0.7m・深さ0.06m円形プランの炉址がある。また、南側及び東側に6個程の円形柱穴を検出しているが、同住居址に伴うかどうかは後世の柱穴と混在しており判断がむつかしい。遺物は口縁上部に刻目突帯を有する下城式系の壺型土器（27・28）等が出土している。

共伴遺物から2号・3号住居址は弥生時代後期の住居址と考察される。

### (2) 遺 物 (第20図)

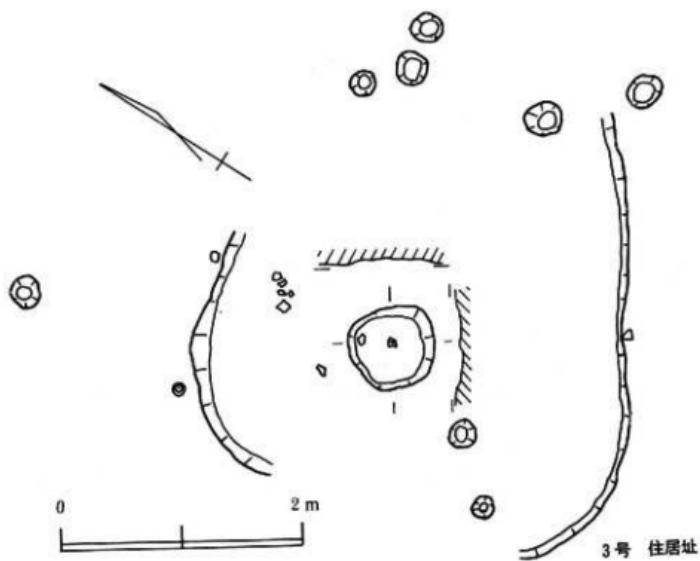
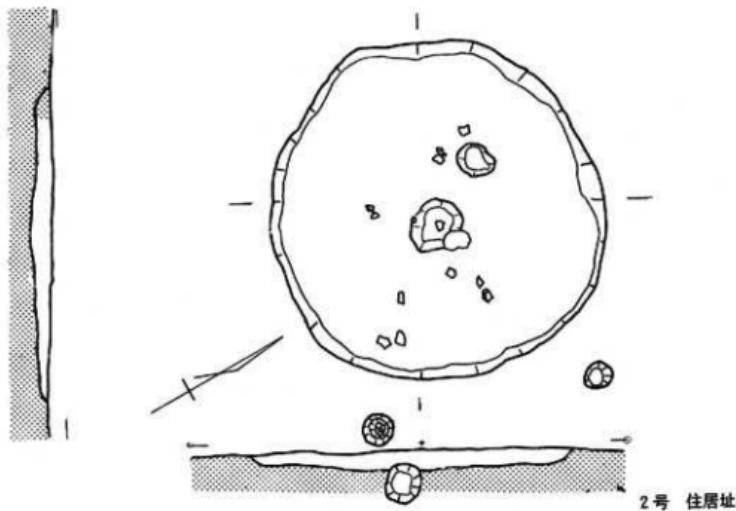
#### 弥生土器 (第20図27~30)

遺物総数の4%にあたる16点出土しているが、ほとんどが小片で反転復元できうるものはない。

ほとんど壺型土器で、口縁上部に刻目突帯を有する下城式系のもの（27・28）、無文のもの（29・30）が出土している。

27は口縁部に刻目突帯を有する壺型土器の口縁部で、口唇部はやや尖り、突帯は下方を向いている。28は口縁上部に刻目突帯を有する壺型土器の口縁部で、口唇部はやや外反し、突帯は水平方向である。29・30は壺型土器の口縁部で、口唇部は丸みをもち、無文である。

なお、これらの詳細については観察表を掲載したので、参考にしていただきたい。



第11図 2号・3号住居址実測図

### 3. 古墳時代以降の遺構と遺物

#### (1) 遺 溝 (第13~17図)

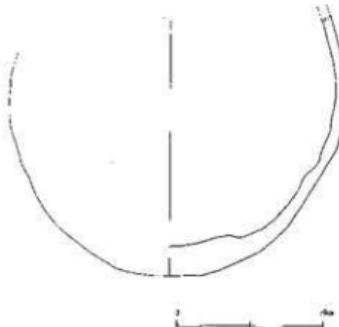
住居址 3軒 (1号・4号・5号) と方形周溝状遺構 2基・方形土坑及び建造物掘立柱 3軒を含む925個の柱穴群を検出している。

#### 住 居 址 (第13~16図)

方形プランのもの 3軒 (1号・4号・5号) が検出されている。

1号住居址は調査地の北西部 D-5 グリット

から検出されたもので、住居址中央部に埋甕を有するタイプの竪穴式住居址である。方形プランの住居址で、東西4.92m・南北4.58m のほぼ正方形を呈している。床面は平坦で、壁面は約60度で立ち上がり、壁高は0.25m を計る。柱穴は8個検出しているが、すべて同住居址に伴うもので、方形に隣接あるいはほぼ同個所に2個ずつ配されている。これは既存柱の補強及び建替えが成されたためと考察される。柱穴の規模は径0.3~0.4m・深さ0.34~0.51m を計る。



第13図 1号住居址出土甕型土器

なお、同住居址の中央部には埋甕が施されているが、甕型土器が径0.2m 程床面がレンズ状の小円形土坑内に埋められている。その小土坑内及び周辺に焼土が確認される。

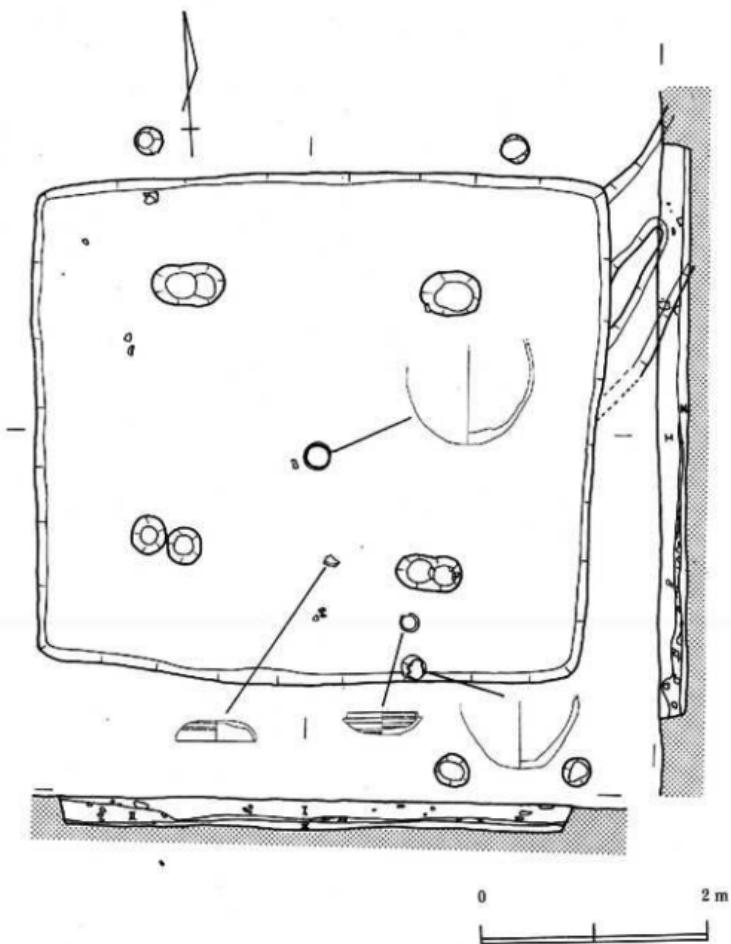
遺物は土師器甕型土器 (第13図・35) ほか須恵器杯 (49)・須恵器蓋杯(48) 等が出土している。また、混入遺物として繩文土器も出土している。

4号住居址は西側 F-4 グリットから検出されたもので、方形プランの竪穴式住居址である。東西2.7m・南北2.8m、壁面は約50度で立ち上がり、壁高0.15~0.25m を計る。床面は平坦で、径0.13~0.18m・深さ0.19~0.32m の円形柱穴が壁面に沿って方形に8個配されている。

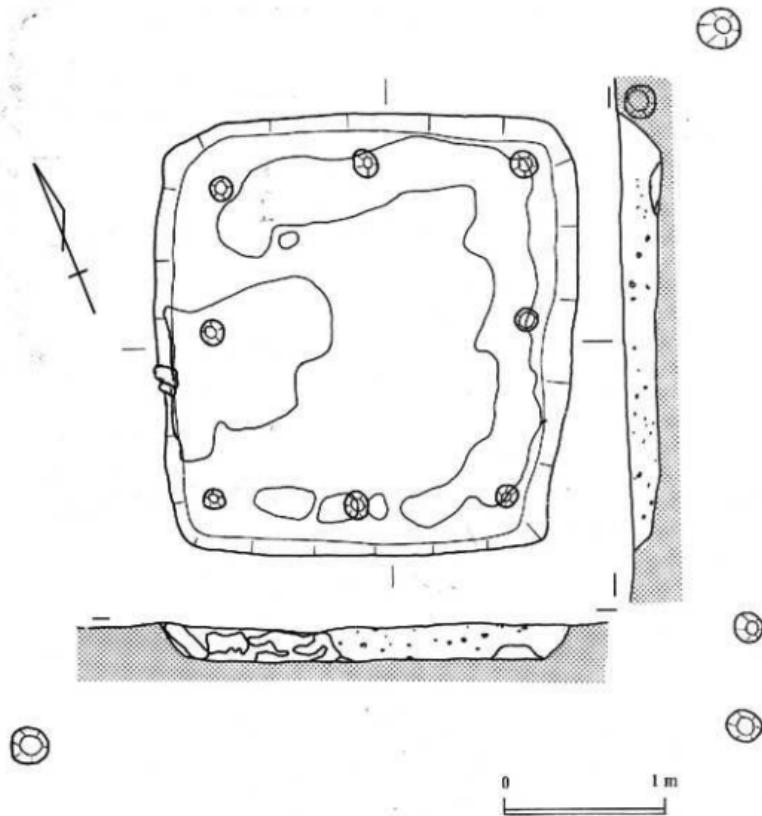
この4号住居址については住居址内北辺から東辺にかけて帯状に、さらに西辺には円形状に灰白色の粘質土塊が混入しており、住居とは別の機能をもつ遺構の可能性もある。

遺物は土師器の甕型土器と高台付杯の小片 2点が出土している。

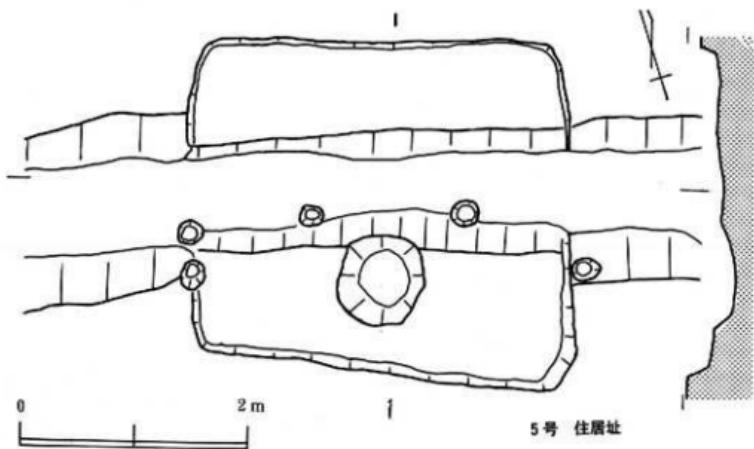
5号住居址は北側 F-6 グリットから検出されたもので、方形プランの竪穴式住居址であるが、中央部を後世の溝が横断し、削平されている。東西3.9m・南北3.36m の長方形を呈し



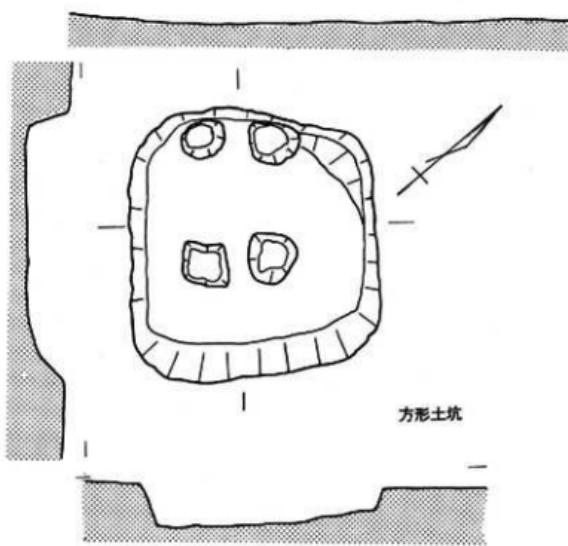
第12図 1号住居実測図



第14図 4号住居址実測図



5号 住居址



方形土坑

第15圖 5号住居址・方形土坑実測図

ている。床面は平坦で、壁面は65度で立ち上がり、壁高は0.15～0.25mを計る。柱穴は住居址内から2個・壁面から2個の計4個検出しているが、同住居址に伴うものは中央部左右に配されている2個で、径0.25～0.3m・深さ0.35mを計る。また、住居址の南側に径0.85m・深さ0.2mの円形土坑が検出されているが、同住居址に伴うものが判断がむつかしい。

遺物は出土していない。

#### 方形周溝状遺構（第16図）

方形周溝状遺構は西側から2基検出されている。

1号方形周溝状遺溝はD-3からE-3グリットにかけて検出されたもので、幅0.84～1.14m・深さ0.04～0.1mの溝が方形に巡らされている。北西角に幅0.6mの陸橋が設けられている。中央部は東西2.2m・南北1.66m、周溝外側と同レベルになっている。また、内側北東部には鉢型土器が埋められ、周囲には焼土が検出されている。

遺物はこの鉢型土器のみである。

2号方形周溝状遺溝は1号方形周溝状遺構の東に隣接したD-4グリットから検出されたものであるが、検出面が床面に近く壁面がわずかに残存しているのみで、すでに床面が検出されている部分もあり、プランがはっきりしない。幅0.35～0.75mの周溝が巡らされている。

この遺構について、使用目的及び機能について不明な点が多いが、1号方形周溝状遺構において火を使用した形跡があり、住居址あるいは祭祀的な遺構と考察されるが、このようなタイプの遺構は珍らしく、また、不明な点も多いことから、ここでは周溝状遺構とした。

#### 方形土坑（第15図）

調査地の南西C-2グリットから検出されたもので、長軸2.4m・短軸2.14m・深さ0.3～0.4mを計る。床面は傾斜し、中央部に2個・西辺に2個の計4個の凹形及び不整形柱穴が検出されている。

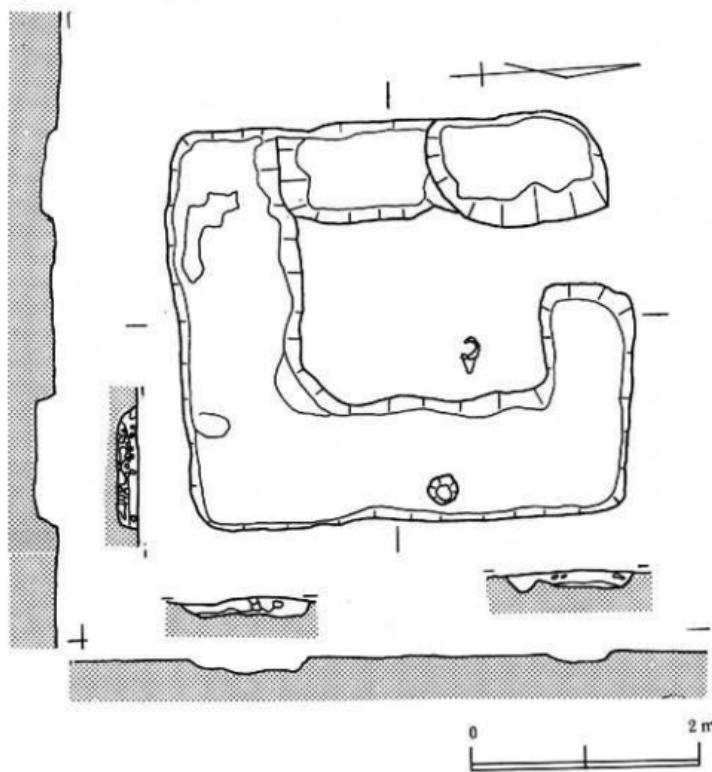
遺物は出土していない。

#### 円形土坑（第10図）

調査地の北F-6グリットから4基検出している。径0.5～1.0m・深さは浅く0.03～0.12mを計る。床面は平坦である。

#### 掘立柱建物及び柱穴（第10図）

掘立柱建物は調査地の西側に3軒検出しているが、調査地全体には925個の柱穴群が検出されており、何回となく同場所に掘立柱建物が建てられたことを表しており、より複雑な柱穴群となっている。ほとんど円形でわずかに方形柱穴が存在する。



第16圖 1号方形圓溝状造構実測図

1号掘立柱建物はF-4からF-5グリットにかけて検出されたもので、1軒×2軒、柱間1.6~2.5mの小規模の建造物である。径0.48~0.6m・深さ0.23~0.5mの円形柱穴で比較的大きい。柱穴内埋土は黒色土にアカホヤブロック及び黒色土下にアカホヤブロック混入の黒褐色土となっている。遺物は出土していない。

2号掘立柱建物はE-2からE-3グリットにかけて検出されたもので、2軒×3軒、柱間1.8~2.3mの建造物である。径0.25~0.47m・深さ0.22~0.43mの円形柱穴である。遺物は北東柱穴から土師器の高台付杯が出土している。

3号掘立柱建物はD-2からE-2グリットにかけて検出されたもので、2軒×2軒、柱間1.85~3.1m小規模の建造物である。径0.25~0.5m・深さ0.14~0.27の円形柱穴である。遺物は北西柱穴から土師器杯が出土している。

#### 溝状遺構（第10図）

調査地北縁辺部から東側にかけて7条、南側に1条の計8条検出されているが、いずれも近世~近代にかけて畑作用の排水として掘られたものと考察される。長いもので現存27mを計る。

#### (2) 遺 物（第12・20・21図）

##### 土 師 器（第12・20図）

全体の31%にあたる110点が住居址及び柱穴等に伴って出土している。器形は杯及び甌型土器が多く、その他高台付のものも出土している。

第13図の甌型土器は1号住居址から出土したもので、口縁部はすでに胴部以下が残存している。外面は明らかに火を受けた形跡があり、所々焼けている。胴部最大幅部を境にして上部は浅黄橙色、下部は明褐色を呈している。胎土は荒く3~5mm前後の粒子を含み、ハケ調整である。同型式の土器が1号住居址の南辺部からもう1点(32)出土している。

その他壠が多数出土しているが、小さいものから大きいもの、底部がはっきりしているものや丸みをおびて境目がはっきりしないもの及び段をもつもの、高台付のもの等バラエティに富んでいる。底部はすべてヘラ切り底である。

これらは、時期的・時代的な変化であると考察される。

各部の計測・詳細については観察表を付したので、ここでは省略する。

表2 土師器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考			
				外 面			外 面						
第2082	31	壺	胴部底部	底部付近は縦位のハケ 胴部はヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡黄褐色 10YR8/3	灰白色 10YR8/2	1~3mmの小石を多量に含む	1号住居址出土 埋蔵			
"	32	"	"	底部付近は縦位のハケ 胴部はヨコナデ	ヨコナデ	やや不良	黄褐色 10YR8/6	黄色 10YR8/6	3~5mmの小石を多量に含む	1号住居址出土 底部炭付着			
"	33	"	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色 7.5YR6/6	明褐色 7.5YR5/8	あらい 3mm前後の砂粒を多量に含む				
"	34	"	肩部	不定方向のハケ	ナデ	"	褐色 7.5YR7/6	淡黄褐色 7.5YR8/4	あらい 3~4mm前後の砂粒を多量に含む	1号方形周溝状遺 壺出土			
"	35	壺		ヨコナデ	ヨコナデ	"	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	2mm前後の砂粒を含む	P 25 6出土 ヘラ切り底			
"	36	"	底部	"	"	"	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	"	ヘラ切り底			
"	37	"	"	"	"	"	淡黄褐色 7.5YR8/6	淡黄褐色 7.5YR8/6	"	"			
"	38	"	"	"	"	"	明褐色 7.5YR7/2	淡褐色 7.5YR7/3	"	P 25 出土 高台付底部(高さ 0.5m)			
"	39	"	口縁部	"	"	"	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	"	P 25 出土 口唇部は丸い			
"	40	"	"	"	"	"	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	"	"			
"	41	"	"	"	"	"	淡褐色 10YR8/3	淡褐色 10YR7/4	"	P 25 2 出土 口唇部は丸い			
"	42	"	底部	"	"	"	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR5/8	"	ヘラ切り底			
"	43	"	"	"	"	"	淡黄褐色 7.5YR8/6	淡黄褐色 7.5YR8/6	"	"			
"	44	"	"	"	"	"	淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 10YR8/4	"	"			
"	45	"	"	"	"	"	淡黄褐色 10YR8/4	灰褐色 10YR5/2	"	"			
"	46	"	"	"	"	"	淡黄褐色 7.5YR8/6	淡黄褐色 7.5YR8/6	"	P 6 3 出土 ヘラ切り底			
"	47	"	"	"	"	"	淡黄褐色 7.5YR8/6	淡黄褐色 7.5YR8/6	1mm前後の砂粒を多量に含む	P 29 3 出土 高台付底部(幅0.5m・高さ1.2m)			

P00~柱穴番号

### 須 恵 器 (第20図)

わずかに 7 点出土している。48は蓋杯で、口径14.2cm・器高3.5cm (推定) を計る。天井部は平坦で、口縁部の境は甘く、緩やかに屈曲し口唇部に至る。器厚は厚く、口唇部は丸みをもっている。両面とも灰色を呈し、調整はヨコナデ調整である。胎土は 2mm 前後の粒子を含み、焼成は良好である。49は抔で、口径12.3cm・器高3.9cm を計る。立ち上がりはわりと短く内傾し、口唇部は丸く、受け部との境に沈線を巡らしている。底部には 1 本線のヘラ記号を有している。器厚はわりと厚く、底部にいくに従って厚くなっている。両面とも灰色を呈し、調整はヨコナデ調整である。胎土は 2mm 前後の砂粒を含み、焼成は良好である。50~52はいずれも小片で、50は蓋抔、51は杯(鉢)、52は壺あるいは甌類の一部分と考察される。いずれも灰色を呈し、調整はヨコナデ調整で、胎土は 2mm 前後の砂粒を含み、焼成は良好である。

48・49は 1 号住居址から出土したもので、須恵器のⅢ b 期に相当するものである。よって、同住居址は 6 世紀後半に比定される。

### 白 磁 (第21図)

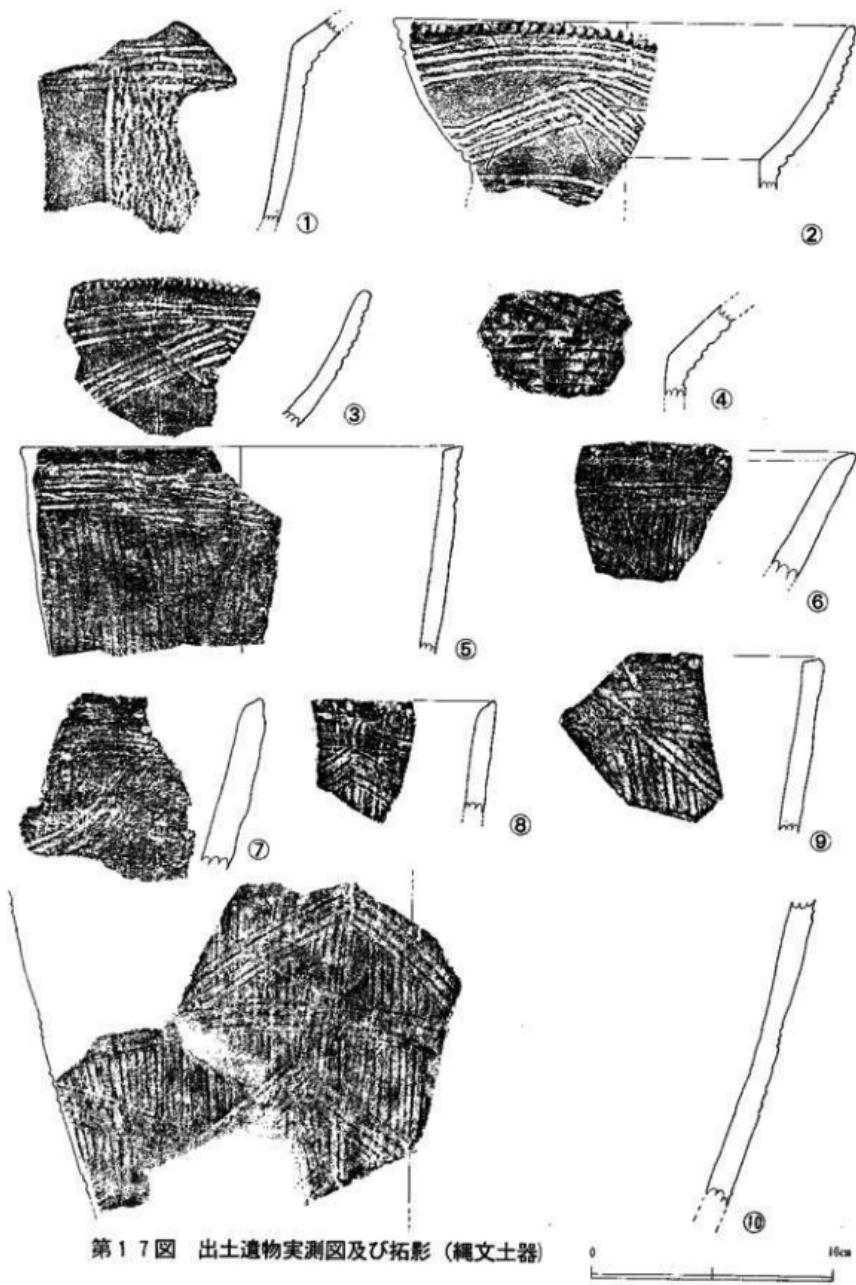
1 点出土している。53は鉢の底部で、幅0.6cm・高さ0.1cm の高台を有している。底部径8.6cm (推定) を計る。

### 青 磁 (第21図)

4 点出土している。54は小鉢の口縁部で、波状口縁を呈している。両面灰オリーブを呈し、器厚は薄い。55は小碗の口縁部で、口縁上部が外反している。両面灰白色を呈し、器厚是非常に薄い。56は小碗の底部で、外面は明緑灰色、内面は灰白色を呈している。器厚是非常に薄い。

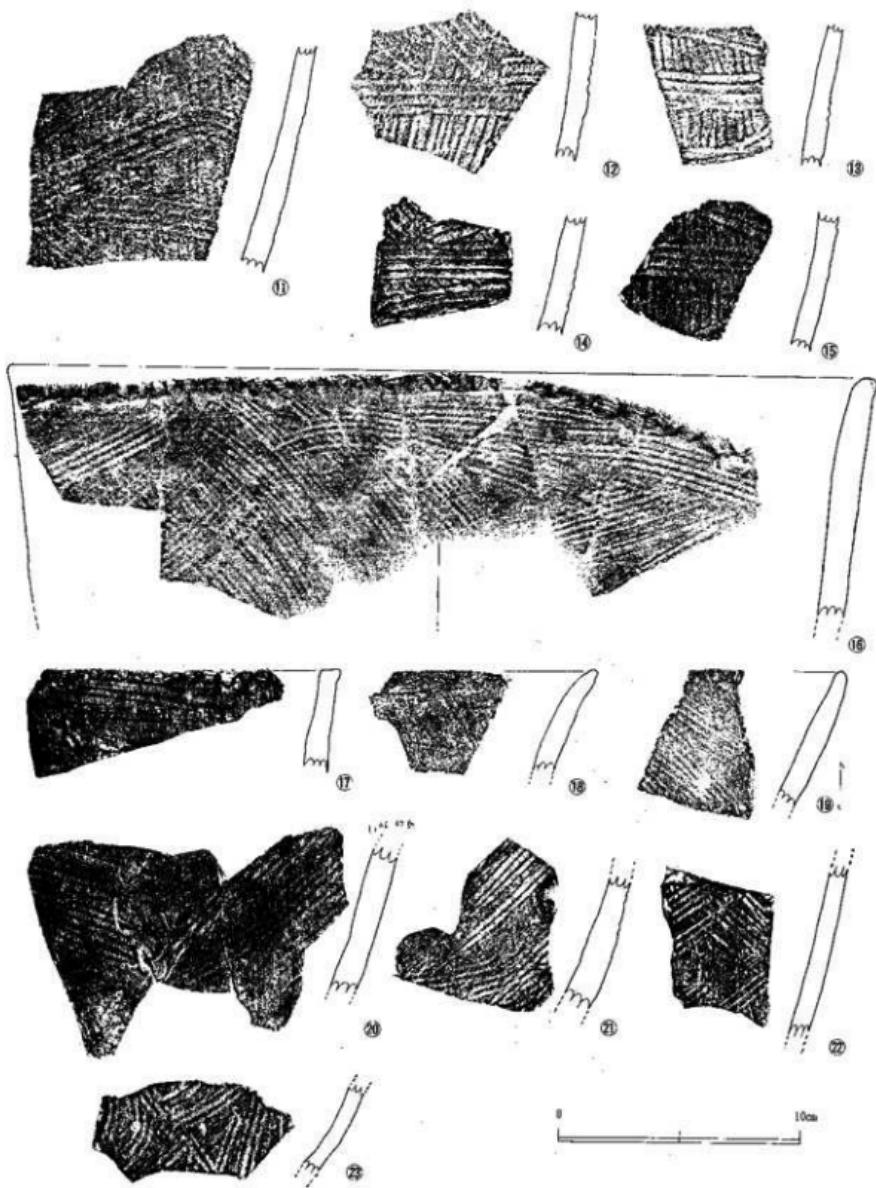
### 陶 器 (第21図)

2 点出土している。57は擂鉢で、両面にぶい赤褐色を呈している。58は碗(鉢)の底部で、高台は幅4.3cm・高さ0.9cm を計る。外面にはにぶい橙色のうえに黒色の釉がかかり、内面にはにぶい橙色を呈している。

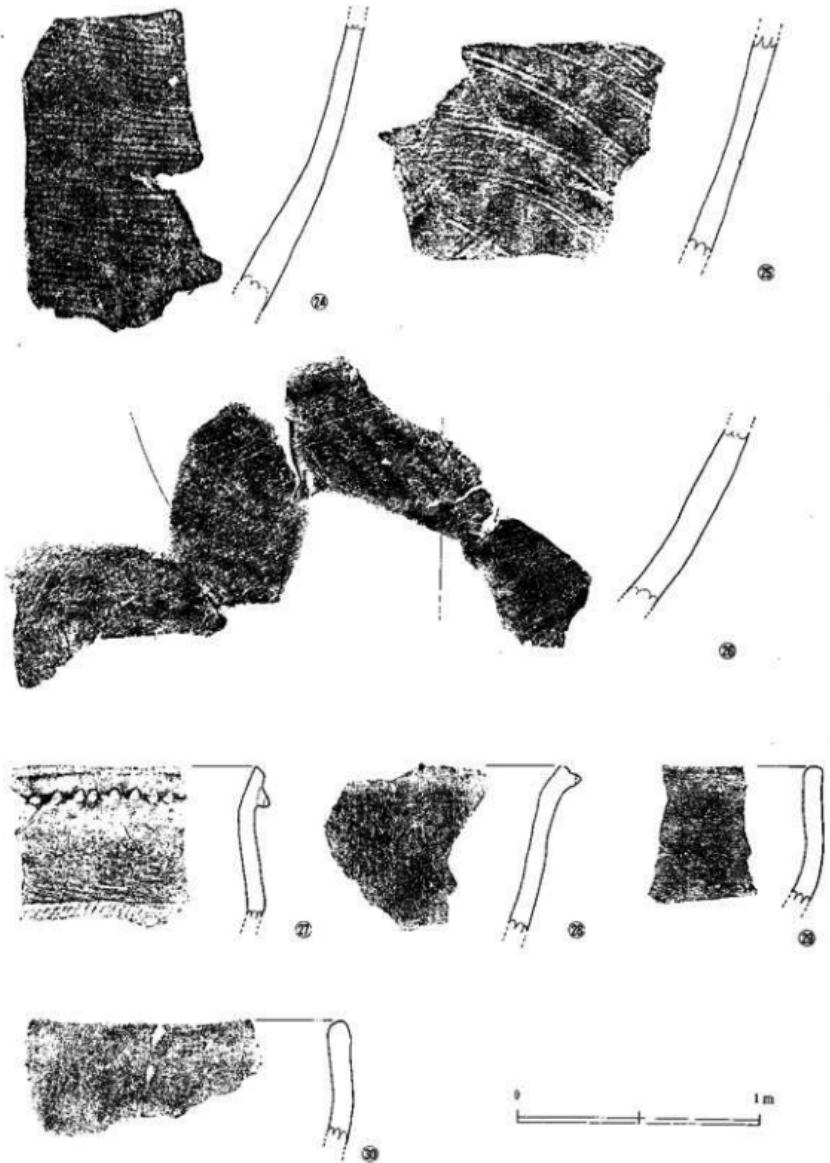


第17図 出土遺物実測図及び拓影（縄文土器）

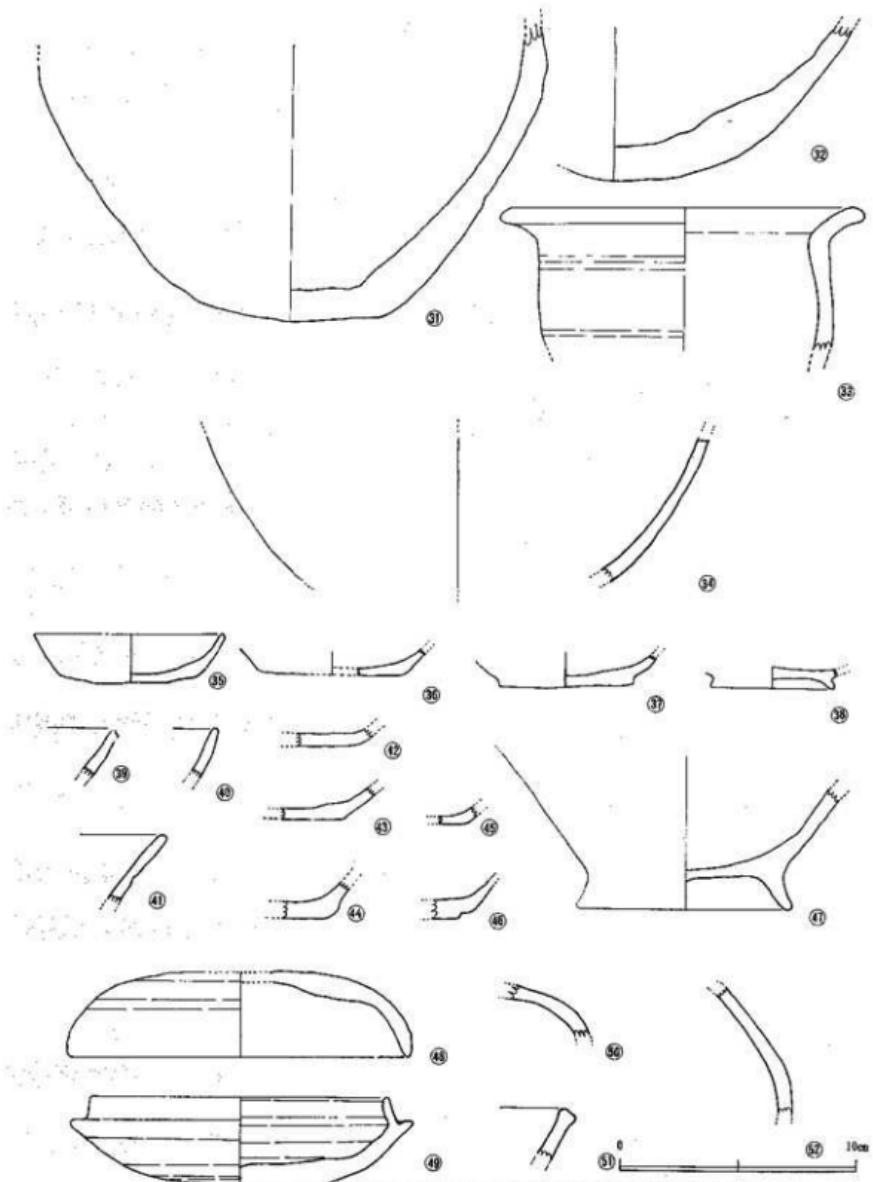




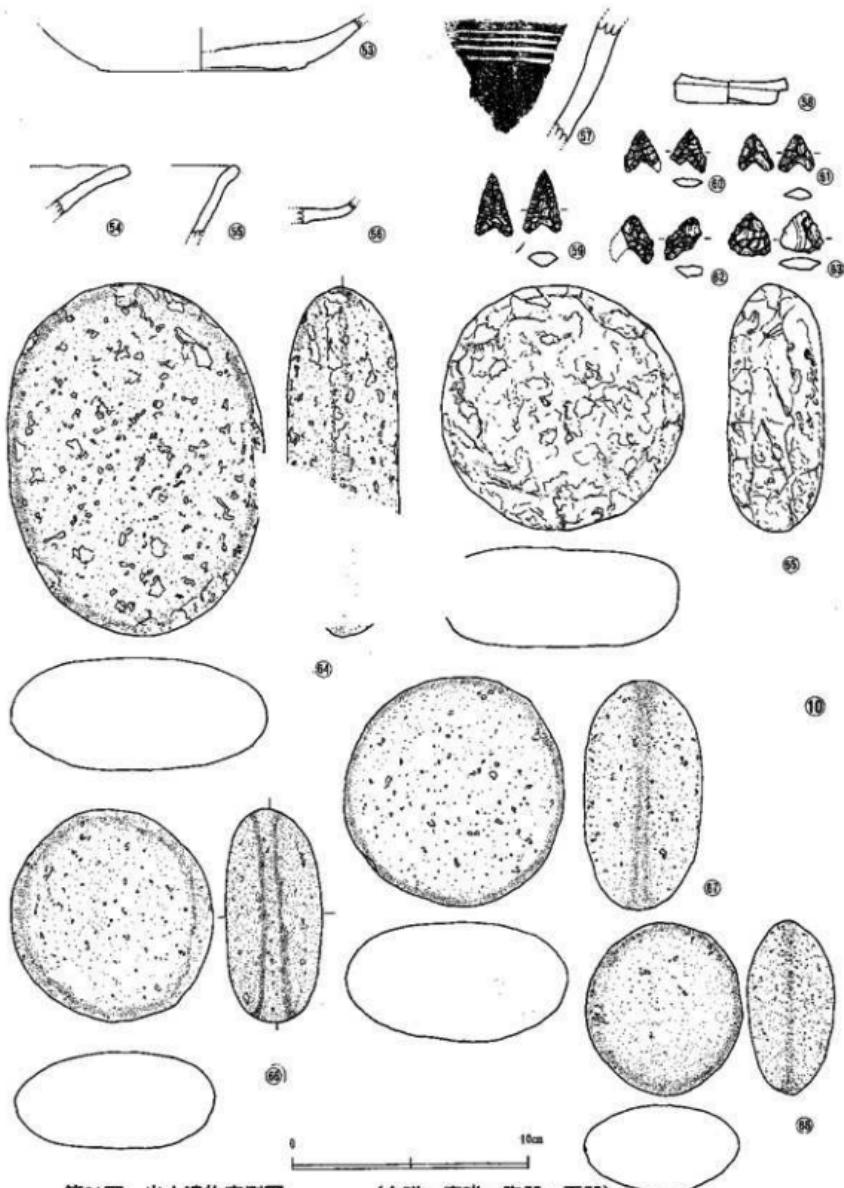
第18図 出土遺物実測図及び拓影（縄文土器）



第19図 出土遺物実測図及び拓影（縄文土器・弥生土器）



第20図 出土土器実測図（土師器・須恵器）



第21図 出土遺物実測図 (白磁・青磁・陶器・石器)

## V. まとめ

日高正晴

この寺山遺跡は、西都原古墳群台地の西側に並ぶ清水丘陵台地上の一角に位置しているが、この台地上には清水西原古墳群が存在している。

さて、この遺跡の発掘調査において注目されることは、弥生期から古墳期にかけての住居址が現れ、さらに、歴史時代の平地建物跡も発見されたということであるが、また、特殊な形態を有する周溝状造構も検出された。それに、古く遡った縄文早期の集石遺構も数多く発見され、この寺山遺跡が極めて古い時代から中世期に至るまで集落が形成してきた地域であることを本発掘調査において立証することができた。

さて、縄文時代遺跡としては、本遺跡の北東部に発見された18基の集石遺構をあげなければならぬが、西都市内の洪積層台地からは、これまでに数多くの集石遺構が姿を現している。古くは昭和32年5月、西都原の原口遺跡<sup>(1)</sup>で1基発見されたのを始めとして、昭和63年10月には市内鶴日原遺跡から4基、そして、平成元年7月からの同中原遺跡の発掘調査では11基、さらに、平成元年10月に行われた串木第2遺跡<sup>(2)</sup>からは3基集石遺構を確認することができた。

また、この寺山遺跡の集石遺構周辺からは、早期の轟式縄文土器が出土し、しかも、その土器形式では最も古いタイプのものであったことは興味深かった。しかし、本遺跡の発掘調査において特筆すべきことは、各時期を通じての住居址が発見されたことである。

まず、弥生時代では、2号及び3号住居址があげられるが、2号住居址は不整な円形状を呈しており、年代的に弥生後期の前半頃の時期に比定される。一方3号住居址は、下條系突帯文土器も伴出したことなどから弥生後期でも初頭頃に推定されそうである。

そして、この2号及び3号住居址が多少変形し始める時期が、いわゆる「日向型変形住居址」の初現の時期でもある。そのことは、前述の串木第2遺跡の3号と4号の住居址についても同一様式の出現を同一の時期頃に想定した。

下って古墳時代の住居址としては、方形プランの1号・4号・5号住居址が現れたが、中でも1号住居址からは、編年様式としてⅢb形式の須恵器が出土したことにより、西都地方の遺跡からよく検出され、また、この1号住居址からも確認された胎土に粒子入りの土師器の年代も推定ができることになった。それで、この1号住居址をはじめとする3ヶ所の住居址は、およそ6世紀後半頃の時期に比定することができる。

次に、方形周溝状造構について述べてみたい。この造構は2ヶ所で発見できたが、1号遺

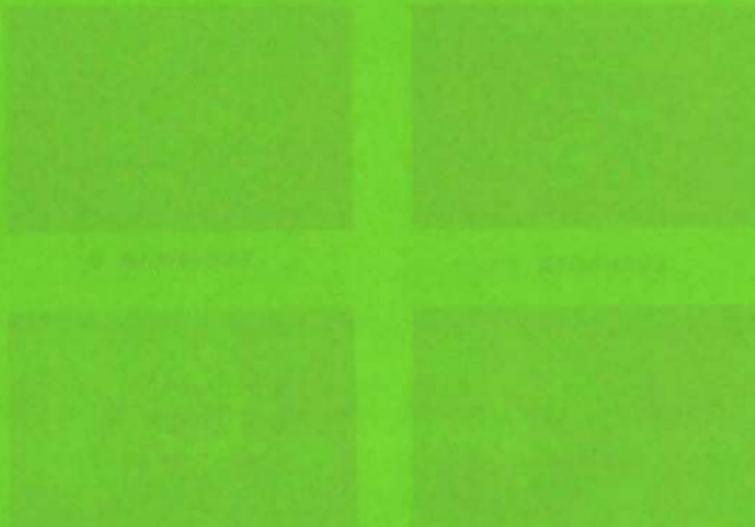
構は、方形基台の周囲に周溝をもち、しかも、その一角に陸橋を有していた。そして、その内部基台には土壇を伴わないので、この遺構を方形周溝墓の範疇に入れることも難しいと思われるが、それでは何か信仰儀礼的な遺構ということになる。しかし、もし基台上に低い墳丘が存在<sup>(6)</sup>したとすると、その封土内に木棺を埋葬したと仮定することもできる。西都市内の茶臼原台地に所在した上野遺跡<sup>(7)</sup>、あるいは熊本県の塚原遺跡の中に、この方形周溝状遺構に類似した周溝墓遺跡を見出すことができる。

さらに、この遺跡の西側地区で、背後がすぐ清水台地になる所に、平地式の掘立柱建物が<sup>(8)</sup>3軒検出された。そして、その住居址内から高台付杯の土師器が出土したが、たまたま、そのタイプと同一の土師器が<sup>(9)</sup>中原遺跡からも発見されているので、中原城が伊東祐重にまつわる城跡ということから、この寺山遺跡の平地住居跡は、同一年代の14世紀代、南北朝頃の建物跡と推定できる。しかも、その掘立柱建物付近から白磁・青磁片が検出されているので、もしかすると、日向土持七頭の中の清水土持氏に関連のある建物跡かもしれないと思う。

#### 註

- (1) 西都市「原口遺跡」「西都の歴史」1976年9月
- (2) 西都市教育委員会『鴨目原遺跡』西都市埋蔵文化財調査報告書第7集 1989年3月
- (3) 西都市教育委員会『中原遺跡』西都市埋蔵文化財調査報告書第10集 1990年3月
- (4) 西都市教育委員会『串木第2遺跡』西都市埋蔵文化財調査報告書第15集 1991年3月
- (5) 西都市教育委員会「上野遺跡」「西都原古墳文化考」西都原古墳研究所年報 第5号 1988年3月
- (6) 熊本県教育委員会『塚原』熊本県文化財調査報告書 第16集 1975年3月
- (7) 註の(3)と同じ

# 図 版

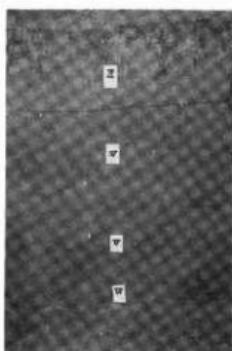




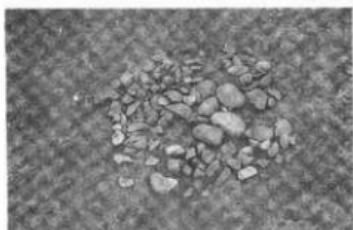
図版 1



寺山遺跡遠景



基 本 土 層



1号 集石遺構検出状況



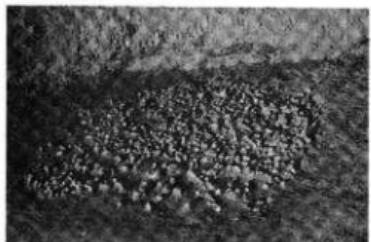
2号 集石遺構検出状況



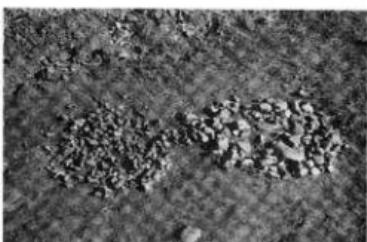
3号 集石遺構検出状況



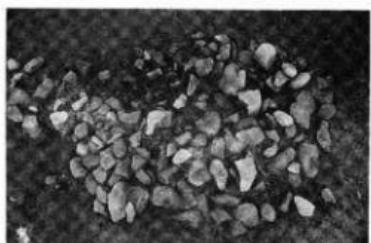
4号 集石遺構検出状況



5号 6号 集石遗構上面検出状況 ①



5号 6号 集石遺構検出状況 ②



7号 集石遺構検出状況



8号 9号 集石遺構上面検出状況



8号 集石遺構検出状況



9号 集石遺構検出状況

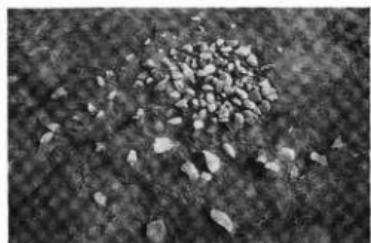


10号 集石遺構検出状況



11号 集石遺構検出状況

図版 3



1 2 号 集石造構検出状況



1 3 号 集石造構検出状況



1 4 号 集石造構検出状況 ①



1 4 号 集石造構検出状況 ②



1 5 号 集石造構検出状況



1 6 号 集石造構検出状況



1 7 号 集石造構検出状況



1 8 号 集石造構検出状況

図版 4



集石遺構分布状況



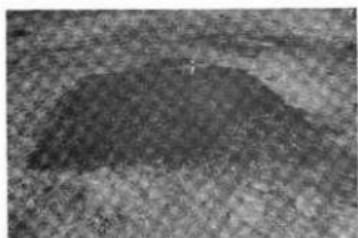
集石遺構分布状況



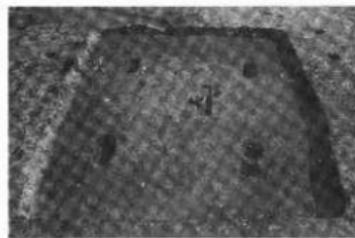
集石遺構分布状況



集石遺構分布状況



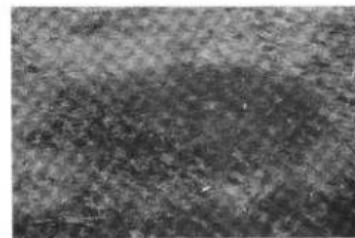
1号 住居址検出状況（アカホヤ火山灰層面）



1号 住居址検出状況

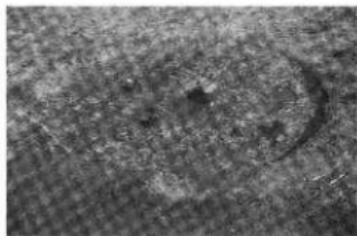


1号 住居址中央埋甕検出状況

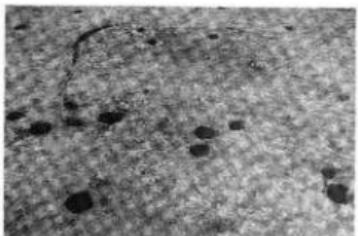


2号 住居址検出状況（アカホヤ火山灰層面）

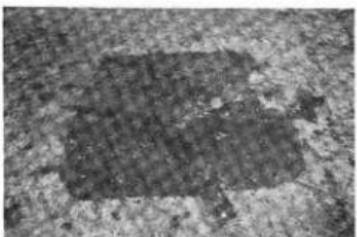
図版 5



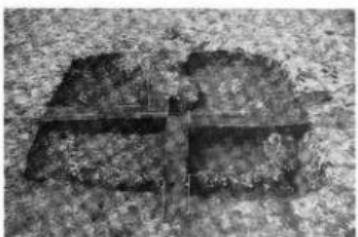
2号 住居址検出状況



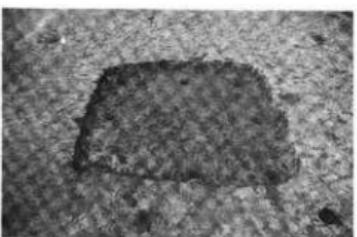
3号 住居址検出状況



4号 住居址検出状況（アカホヤ火山灰層面）



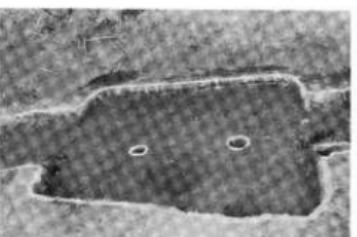
4号 住居址灰白色粘質土出土状況



4号 住居址検出状況



5号 住居址検出状況

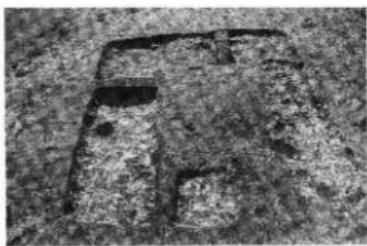


5号 住居址検出状況



土坑検出状況

図版 6



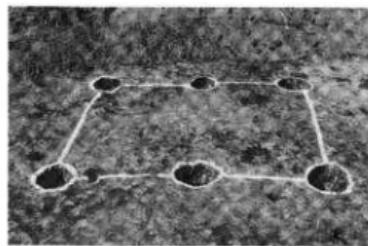
1号 方形周溝状遺構検出状況



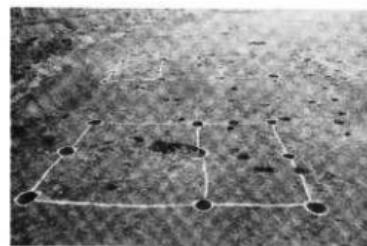
1号 方形周溝状遺構検出状況



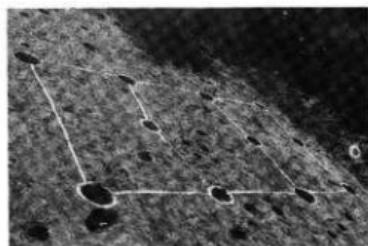
1号 2号 方形周溝状遺構検出状況



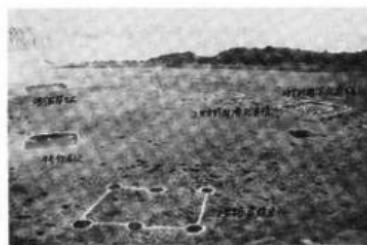
1号 挖立柱建物検出状況



3号 挖立柱建物検出状況



2号 挖立柱建物検出状況

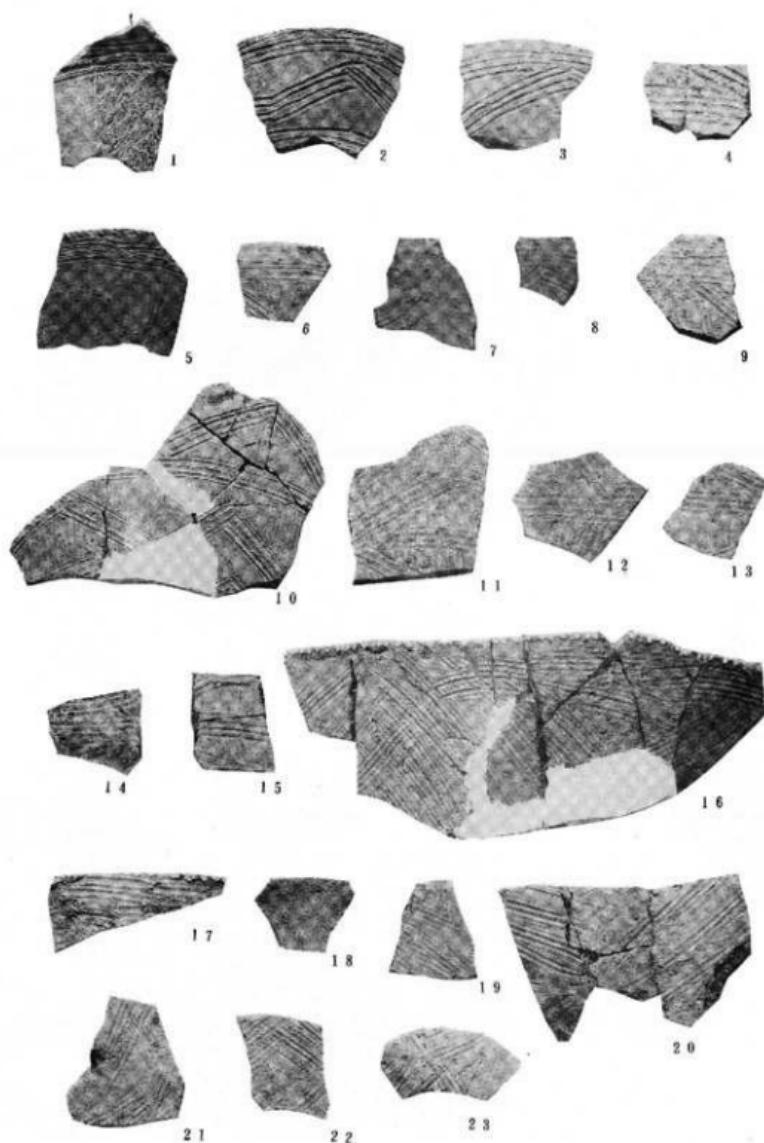


遺構分布状況（北東部より）

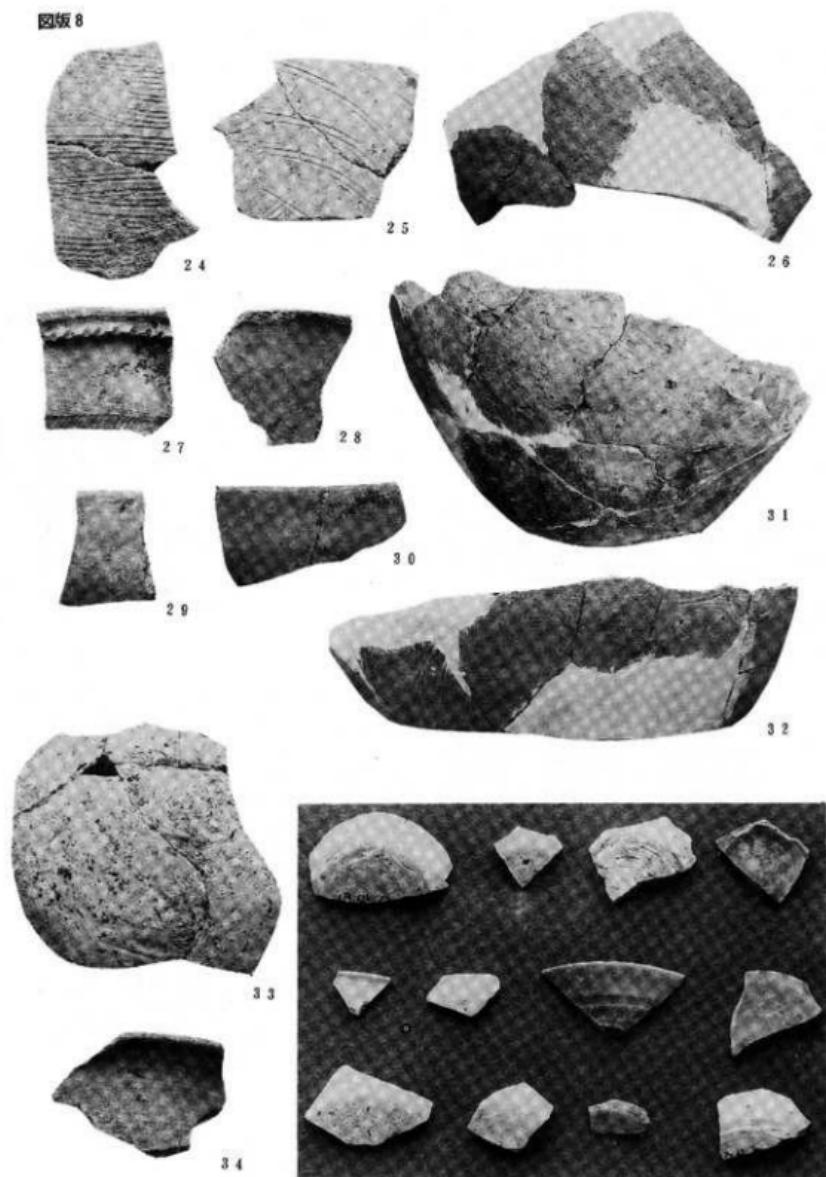


遺構分布状況（北西部より）

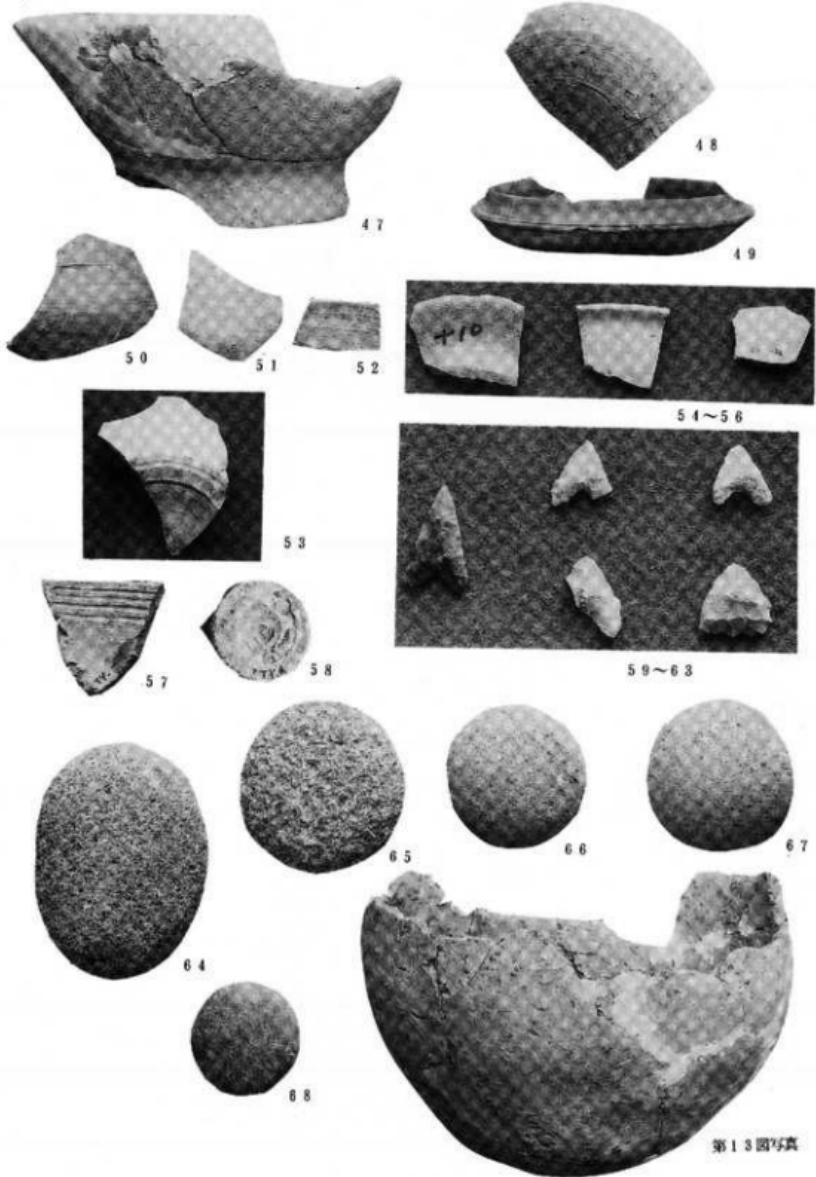
図版 7



图版 8



図版9



第13図写真

